

カマドの支脚利用にみられる集落内のグループ

—古墳時代後期の埼玉県の遺跡を中心に—

末木啓介

はじめに

古墳時代の集落の姿はどのようなものだったか、この問いに対しては黒井峯遺跡など火山灰に埋もれた遺跡をもとに答えられることが多い。

黒井峯遺跡のもたらした情報量の多さは、それまでの集落研究方法に見直しを迫り、今なお多くの研究者により新たな研究手法の模索が続けられている。

こうした努力と黒井峯遺跡の膨大な情報が整理されてきたことにより遺跡の評価について考古分野だけではなく、文献史学や古代家族史からも積極的な問題提起が行われるようになってきた(高久2012)。このように再び活性化しつつある集落研究をより進めるためには、黒井峯遺跡だけではなく他の集落遺跡の検討も大切なのは言うまでもないであろう。

私もかつて埼玉県北部の城北遺跡を取り上げ、カマドに用いられた支脚の違いにより竪穴建物がグループ化できることなどを指摘した(末木2011)。しかし、その視点がどれだけ一般化できるのかについては述べることができなかった。そこで、本論では城北遺跡で確認できた要素が他の集落遺跡でどの程度観察できるかを検証し、竪穴建物群間の紐帯を検討する材料の一つになり得ることを提示しようとするものである。

1 なぜ支脚なのか

古墳時代の集落研究の一つとして人々の日常的な結びつきを検討するが、その材料に支脚を選んだ理由は2点ある。

①支脚の使用に政治的な関与がほとんど及ばないと考えられること。

これまで多くの遺物が“流通”という視点で取上げられてきた。考古学で述べられる流通とは、物を生産し最終使用者まで届ける一連の活動を指すことが多いが、その活動には最終使用者の存在を前提とした生産量の確保や、保管や輸送、そしてそれらに関わるさまざまな調整が必要となる。こうした流通に関わる調整こそが大小の首長層の役割であり、重要な政治活動であったといえるであろう。土師器を含め多くのものが政治活動の結果竪穴建物に暮らす人々にもたらされていたと考えられるのである。

カマドも先進文物の一つとして畿内(河内)を起源とする粘土を用いた脆弱な構造と支脚に高坏を利用するという形で政治的な背景をもって関東地方に導入されたと考えられている(杉井1993)。

しかし、その後カマドが普及していく中では、同じ集落内で支脚を使う竪穴建物もあれば使わない建物もあるし、同時期でも素材や形態が異なるものが使用されるなど、支脚利用形態は使用者の都合により変わっていったものと考えられる。つまり、カマドが普及していく際に支脚を使うか使わないか、使うとすればどのような支脚にするのかについては政治的な背景はなく、日常生活の中で生まれた慣習などによるところが大きいと推定される。このような政治的

な影響を受けない支脚の選択の中に集落内の日常的な関係が見て取れると考えた。

②カマドを中心とした厨房は女性の権限が強く及ぶ空間と考えられること。

カマドは厨房施設であることから、女性のエリアであったと考えられていることや(笹森1990、2007)、姑の世帯と嫁の世帯ではカマドを同じにすることを忌む、「カマド禁忌」の存在(高群逸枝1975)、さらに、日本書紀孝徳天皇大化二年三月条の記述などにみられるカマドや厨房道具に対する同火意識の強さから、厨房に関する道具が集落内における女性間の関係を示す可能性があると考えた。特に古代において土師器製作は女性の労働であったことを考慮すると、土製の専用支脚をつくる場合その製作者の性別は女性とほぼ特定できる。

以上の2点から支脚利用には、政治的な動態とは無関係に集落内の日常的な人々のつながりの一端、特に女性を中心とした紐帯が反映されていると推定したのである。

2 支脚の分類

支脚について分類し、用語についても解説を行っておく(第1図)。

支脚には土器を転用して支脚にする場合、支脚専用品を粘土で製作する場合、礫を使用する場合の3種がある。このうち土器転用支脚については「高坏転用」「小型甕転用」などと呼ぶ。そして粘土により専用の支脚をつくる場合は「土製専用」とする。

土製専用支脚については、これまで、恋河内昭彦氏(2008)や福田信子氏(1998)などが分類を行っているので、それらを参考にしながら製作技法と形状などにより以下のように分類した。

I類：報告書で地山掘り残しとか粘土塊などと表現されるもの。

II類：棒状のもの

III類：筒状のもの(細い棒のようなもので穿孔されているものや、孔部分に整形痕のないものも含む)

IV類：高坏の脚状のもの(頂部をふさぐものを1、あけるものを2)

また、IからIV類すべてについて、シルエットが直線的なものをa、山形なものをb、裾を屈曲してつくるものをcとした。

なお、I類とII類の違いについては報告書に記載されている図、写真、文章だけでは判断がつかないものもあったが、基本的に粘土の塊にあまり整形を施していないと思われるものを含めI類とした。

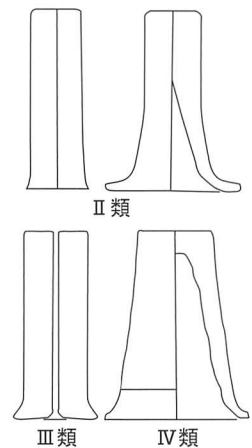
3 遺跡内における支脚利用

今回、埼玉県内で支脚利用が確認できた古墳時代の遺跡は235である。このうち県内9遺跡を選んで検討を行うほか、県外の1遺跡を参考として提示する⁽¹⁾。

個々の遺跡の検討に当たって用いる時期区分は基本的に報告書に従っているが、一部私見による場合もある。

(1)城北遺跡(第2図)

深谷市の城北遺跡(92)(以下、遺跡名に続く()内の数字は第14



第1図 支脚分類

図に対応する)は県北部の妻沼低地にある遺跡で、隣接して砂田遺跡(90)、柳町遺跡(91)、居立遺跡(93)など古墳時代後期の集落が多く営まれる。図14の地域サに含まれる遺跡である。

城北遺跡からは5世紀後半から6世紀前半の竪穴建物が157軒検出されている。報告書ではI期からIV期に分けられ、II期はさらにII1期とII2期に細分されている。

本遺跡は私が支脚の検討を行うきっかけとなったもので、すでに別稿に詳述している(末木前提書)、ここでは支脚によるグルーピングが最も顕著となる時期を取り上げその他の遺跡を分析する際の視点を明らかにしておく。

まず図2左上の支脚別の分布を見てみよう。これは支脚利用の分布を時期に関係なく示した図である。なお、調査区は中央にある道路により南北に分かれている。

一見してわかるとおり北側の調査区では土製専用支脚を使用する住居が多く、南側では高坏や小型甕など土器の転用が目立ち、支脚利用の分布に偏りがあることが指摘できる。

この分布の偏りにはどのような意味があるのかを見るため時期別の支脚利用を示した。

II1期は5世紀第4四半期前半とされている時期で、遺跡内には竪穴建物のまとまりがA～Eの5つある。A、B、Cが土製専用支脚主体、D、Eは高坏転用が主体となっている。

II2期にはAで竪穴建物が姿を消し、BにはII1期から継続してII類を使用する竪穴建物ある。一方で小型甕転用が初めて出現し二つの支脚利用が混在する。小型甕転用の出現の仕方は、支脚利用を共通する竪穴建物がグループとなって移動する可能性を示している。

Cでは土製専用支脚の竪穴建物が新たみられその数も増加する。DはII1期には高坏転用のグループであったが、II2期にはII類の支脚が1軒確認できるだけで高坏転用の竪穴建物は見られなくなる。Eでも竪穴建物が減少し高坏転用が姿を消している。

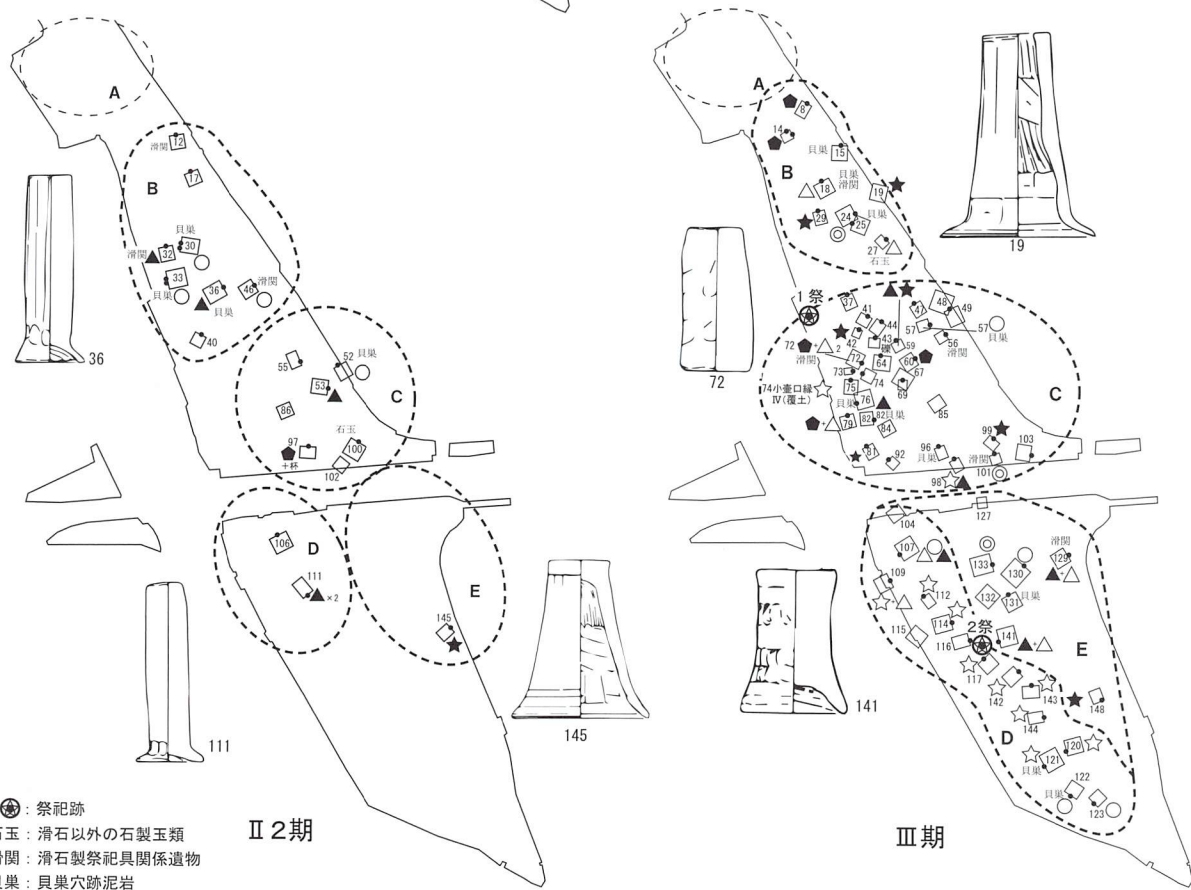
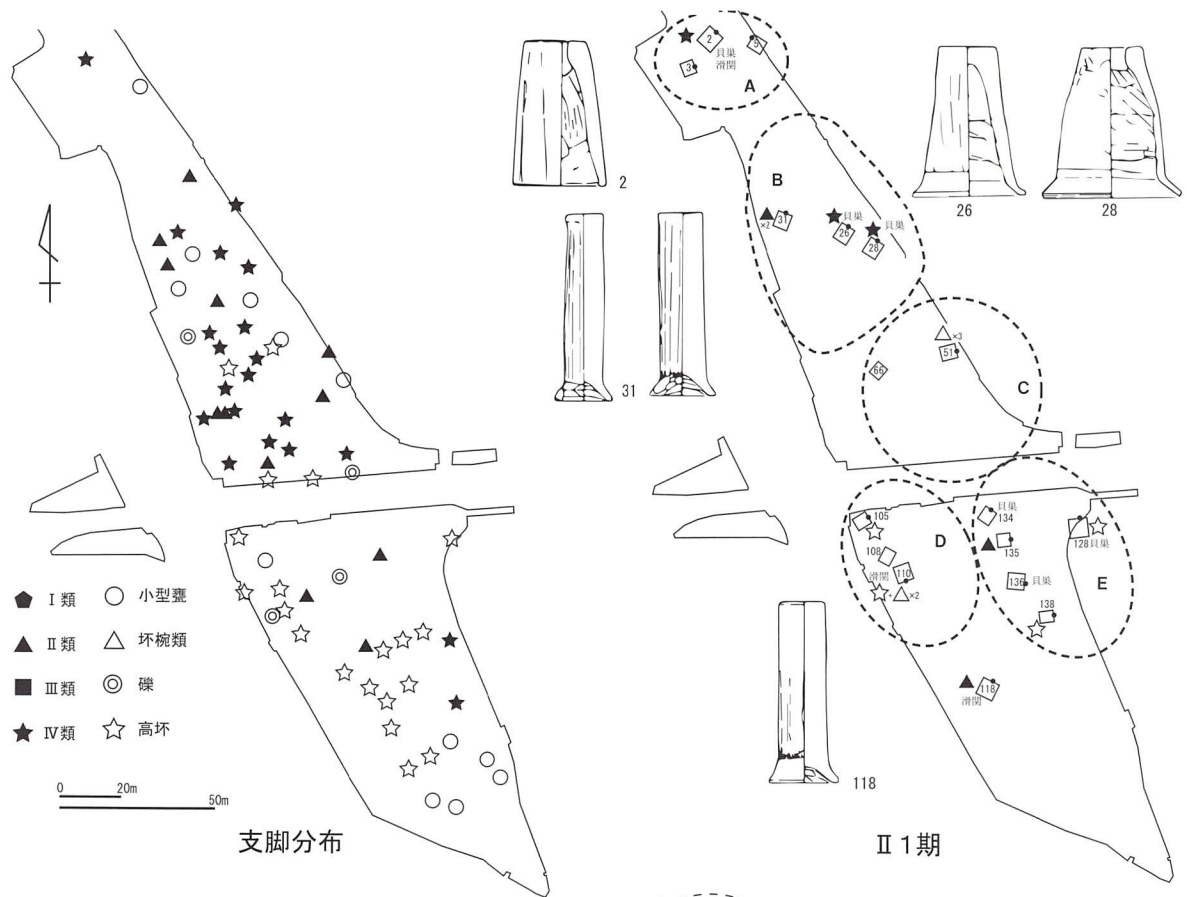
このほか、II1期、II2期を通じてよく似たIIc類の支脚が使用されていることが分かる。II1期ではBの31号で2個体、Dから南に離れた118号で1個体が出土している。そして、II2期にはその位置を踏襲するように、Bの32、36号、Dの111号に分布する。同じ形態の支脚を利用する竪穴建物が遺跡内で位置関係を継続するように占地しているといえる。

III期になると竪穴建物は大幅に増加し、支脚によるグルーピングも一層顕著となる。土製専用支脚はB、Cに、高坏や小型甕など土器転用はD、Eと一部の例外を除き明確に分かれる。BではI類、IV類、礫、杯塚類とバラエティに富むが、I類、IV類は2軒ずつのまとまっているようにみえる。

CはII期の竪穴建物のまとまりがやや西にずれて拡大する。支脚利用はさまざまだがI類の占める割合が高い。

南側の調査区は、II期まで西にD、東にEと別れて竪穴建物のまとまりがあったが、III期には一つの大きなまとまりとなっている。しかし建物の分布に支脚利用を加えると、西側では圧倒的に高坏転用が多く次いで小型甕転用が南方にまとまっているのに対し、東側では土製専用支脚の利用が目立つという違いがある。ここでは、その違いによりDとEに分けた。

Dでは高坏転用の竪穴建物が圧倒的多数でII1期の位置を踏襲するように再出現する。Dの中には小型甕転用やII類など高坏転用以外の竪穴建物も存在するが、それらは高坏転用と混在しないようにその外縁に分布し、居住域が重ならないような意識が認められる。この高坏転用



第2図 城北遺跡の支脚利用

の建物の動態を見ると、集落の拡大は支脚利用が共通する集団が移動して行われる場合があることが見て取れる。

さらに、滑石製品や貝殻穴痕泥岩など石製の祭祀関連遺物の分布を重ねてみると、支脚利用でまとまるグループと関係があることがうかがえる。

石製の祭祀関連遺物は土製専用支脚を使用する北側の調査区からの出土が目立つ。そして高坏転用の堅穴建物で出土しているのはDの121号1軒だけである。

この高坏転用の堅穴建物と他の支脚を利用する堅穴建物との石製祭祀遺物の出土量の違いは集落内祭祀にも反映している点が注目される。

Ⅲ期には図で1祭、2祭と書いてある地点で集落内祭祀の跡がみついている。1号祭祀跡はCの北西に位置し、ブロックの境界を意識した祭祀と考えられるが、ここからは坏を中心とした多量の土器と、剣形、白玉、有孔円板など多くの滑石製品、焼骨が出土している。

一方、2号祭祀跡は一見すると南側調査区の堅穴建物群の中にあるように見えるが、この位置は高坏転用グループとそれ以外の支脚利用のグループの境界であることから、実はここも境界にかかわる祭祀と推測できる。この2号祭祀跡の出土遺物は数点の甕と刀子形、斧形の石製模造品だけで、1号祭祀跡よりはるかに出土遺物が少ない。報告書でも石製模造品の使い方が対照的であるとされている。そして、この違いはこれまで述べてきたとおり支脚利用に見られるグループ内の祭祀関連遺物の出土状況と重なる。つまり、祭祀関連遺物からは土製専用のグループと高坏転用グループとでは異なる祭祀形態を執っていたと考えられるのである。

ここまで述べてきた城北遺跡の例から集落の構成単位や移動について以下の点が指摘できる。

- ①集落内には支脚利用が共通する堅穴建物のグループが存在する⁽²⁾。
- ②支脚利用が共通するグループで移動する場合がある⁽³⁾。
- ③Dに見られる高坏転用グループの移動の姿から、支脚利用が共通するグループは一定期間集落内の同じ場所を占有する場合がある。
- ④支脚利用が共通するグループは同じ祭祀形態をとる可能性がある。

城北遺跡で見られたこれらの特徴が一般的なものであるのか、以下で県内の集落遺跡について支脚利用と祭祀関連遺物に注目し検討を加えていく。

(2)西富田遺跡群(第3図)

女堀川左岸の本庄台地上に立地している遺跡群で、二本松遺跡(13)、夏目遺跡(15)、夏目西遺跡(14)、弥藤次遺跡(12)、社具路遺跡(17)、薬師元屋舗遺跡(16)などの遺跡からなる。この遺跡群は昭和30年代や50年代後半から60年代初頭にかけて行われた発掘調査によって、関東地方の中でもいち早く5世紀中葉にカマドが導入された地域として著名となった。また、図版の都合上カットした夏目西遺跡などこの遺跡群内からは布留系の甕の出土が知られていて畿内との密接な関係を示す資料として注目されている。

本論では遺跡群の中心部に当たる夏目遺跡、社具路遺跡、薬師元屋舗遺跡について検討する。なお、時期区分については大谷徹氏が行ったものを参考にした(大谷2007)。I期が5世紀前半から中葉、II期が5世紀中葉、III期が5世紀後葉、IV期が5世紀末、V期が6世紀初頭から前葉、VI期は6世紀前葉から中葉、VII期は6世紀後葉から末、VIII期は7世紀前半となっている。

カマドの導入期であるⅠ、Ⅱ期は高坏転用だけであるが各遺跡とも散漫な分布である。なお、Ⅰ期には炉とカマドの竪穴建物が混在し、炉を使用する県道調査区の23号からは五徳状土製品が出土している。

薬師元屋舗遺跡では12号でカマドの袖内から白玉が出土しているが、以後、本遺跡では袖に白玉や土玉をカマドの袖に埋める祭祀行為が継続する。

Ⅲ、Ⅳ期には夏目遺跡で竪穴建物が減少し薬師元屋舗遺跡で増加する。なお、夏目遺跡の国道調査区の西側では竪穴建物建物が分布しない空白域がある。

薬師元屋舗遺跡の竪穴建物分布は、西寄り、中央、東寄りの3つのまとまりがある。中央のグループはこの段階ですでに高坏転用は確認できない。また、袖内に祭祀関連遺物を埋める行為は、西寄りのグループのみで確認できる。しかし、竪穴建物の増加と支脚利用グループの関係ははっきりしない。

Ⅴ期は夏目遺跡の国道調査区でⅢ、Ⅳ期の空白地域に高坏転用の竪穴建物が複数出現する。支脚利用が共通するグループでの移動であった可能性がある。

薬師元屋舗遺跡では竪穴建物は減少傾向だがⅢ、Ⅳ期と同じように3つの地点に分かれて分布している。ただし支脚利用の継続性は明確ではない。

社具路遺跡はこの段階に再び竪穴建物が分布するようになる。分布は調査区の北寄り、中央、南寄りの3つに分かれる。グループ内には1軒ずつ支脚利用が分かる竪穴建物があり北寄りのグループでは小型甕を支脚としている。中央と南寄りからは高坏転用が認められるが、これだけではⅡ期の41号と結びつきがあるとは言えないであろう。

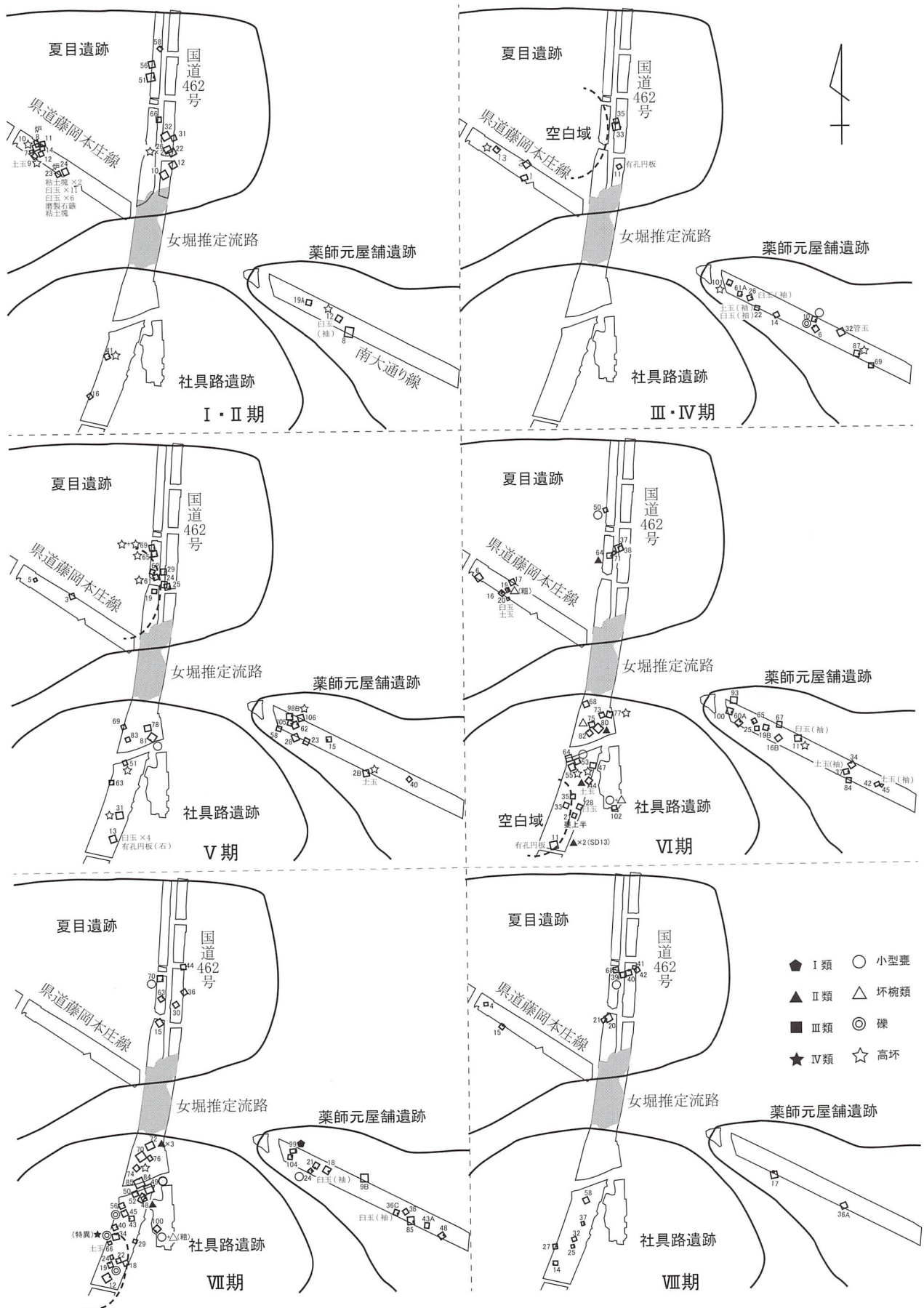
Ⅵ期になると夏目遺跡の高坏転用グループは姿を消してしまう。薬師元屋舗遺跡では支脚利用が確認できる竪穴建物が高坏転用の1軒だけとなる。社具路遺跡での支脚利用の割合が17軒中9軒と50%を超えることを考えると、薬師元屋舗遺跡は支脚を使用しないグループともいえる。

社具路遺跡の支脚利用は、高坏、小型甕、杯塚類、甕による転用支脚が主体となり一部でⅡ類の使用がみられる。Ⅴ期には転用支脚しか見られないことから支脚利用形態が継続したとも考えられる。なお、調査区の西側に竪穴建物の空白域が存在している。そして、Ⅶ期にはこの区域に礫利用のグループが分布する。このことから、支脚利用が共通するグループでの移動であった可能性がある。またⅥ期102号とⅦ期100号は小型甕転用支脚の上に杯塚類を重ねる点が共通していることから継続的な占地といえるかもしれない。

Ⅷ期には各遺跡とも竪穴建物は減少していき支脚利用状況も検討できなくなっている。つまり、Ⅶ期からの支脚利用の継続性は認められない。

滑石製品や土玉などの祭祀関連遺物については、薬師元屋舗遺跡で袖内に埋める行為が認められたが支脚利用との関係性を示す資料は得られなかった。

西富田遺跡群の検討からは、Ⅲ、Ⅳ期からⅤ期への夏目遺跡での高坏転用や、Ⅵ期からⅦ期にかけての社具路遺跡での礫利用が空白域へまとまって進出していると思われることから、城北遺跡で確認できた①支脚によるグループがあること、②グループ単位で移動していること当てはまるが、③は社具路遺跡の一部だけで、④は確認できなかった。



第3図 西富田遺跡群の支脚利用

(3) 秋山遺跡群(第4図)

本庄市にある秋山大町遺跡(37)、秋山大町東遺跡(38)、秋山諏訪平遺跡(39)の3遺跡を仮に秋山遺跡群と呼ぶ。図14の地域オの中に含まれる遺跡群で、利根川水系の小山川上流右岸に位置し、松久丘陵の裾部から東に緩やかに傾斜する斜面に立地している。

遺跡群は5世紀末から古代まで継続する。ここでは支脚利用形態が比較的多く確認できるⅠ期(5世紀末)、Ⅱ期(6世紀前半)、Ⅲ期(6世紀中葉)を取り上げる。

Ⅰ期には秋山大町遺跡B地点で礫利用が2軒、秋山大町東遺跡で1軒だけだが高坏転用の堅穴建物の分布が認められる。わずかな利用状況だがこの様相が以降も継続していく点が注目できる。

Ⅱ期は大幅に堅穴建物が増加する。秋山大町東遺跡をみると、Ⅰ期に空白域Aとした場所に礫利用がまとまって進出している。また、空白域Bには高坏転用が2軒まとまる。そして秋山諏訪平遺跡F地点の南側の空白域Cにも高坏転用が2軒出現する。

秋山大町遺跡では広く堅穴建物が分布するようになるが、D地点南側、B地点北側に礫転用がまとまっている。さらに礫利用のまとまりの南側には支脚利用がほとんど確認できない堅穴建物のまとまりがある。秋山遺跡群は小山川上流域に立地し支脚に利用可能な礫が容易に入手できることから礫利用が中心となることは当然であるが、分布に濃淡があることから、支脚を利用しないというグループがあったことを想定させる。

Ⅲ期になっても支脚利用の分布に大きな変化はない。高坏転用の堅穴建物は秋山大町東遺跡の南側と秋山諏訪平遺跡D地点に分布するだけで秋山大町遺跡には認められない。

また、秋山大町遺跡内でもB地点南寄りに支脚を利用しない堅穴建物がまとまり、その西と北側に礫利用が分布するという状況はⅡ期と同様である。

このように秋山遺跡群では、集落の出現当初からⅢ期まで一貫して秋山大町東遺跡の南から秋山諏訪平遺跡にかけて高坏転用の堅穴建物が分布し、秋山大町東遺跡の北側から秋山大町遺跡にかけては礫利用が分布する。またⅡ期からⅢ期には支脚を利用しない堅穴建物のまとまりも立地が継続している。

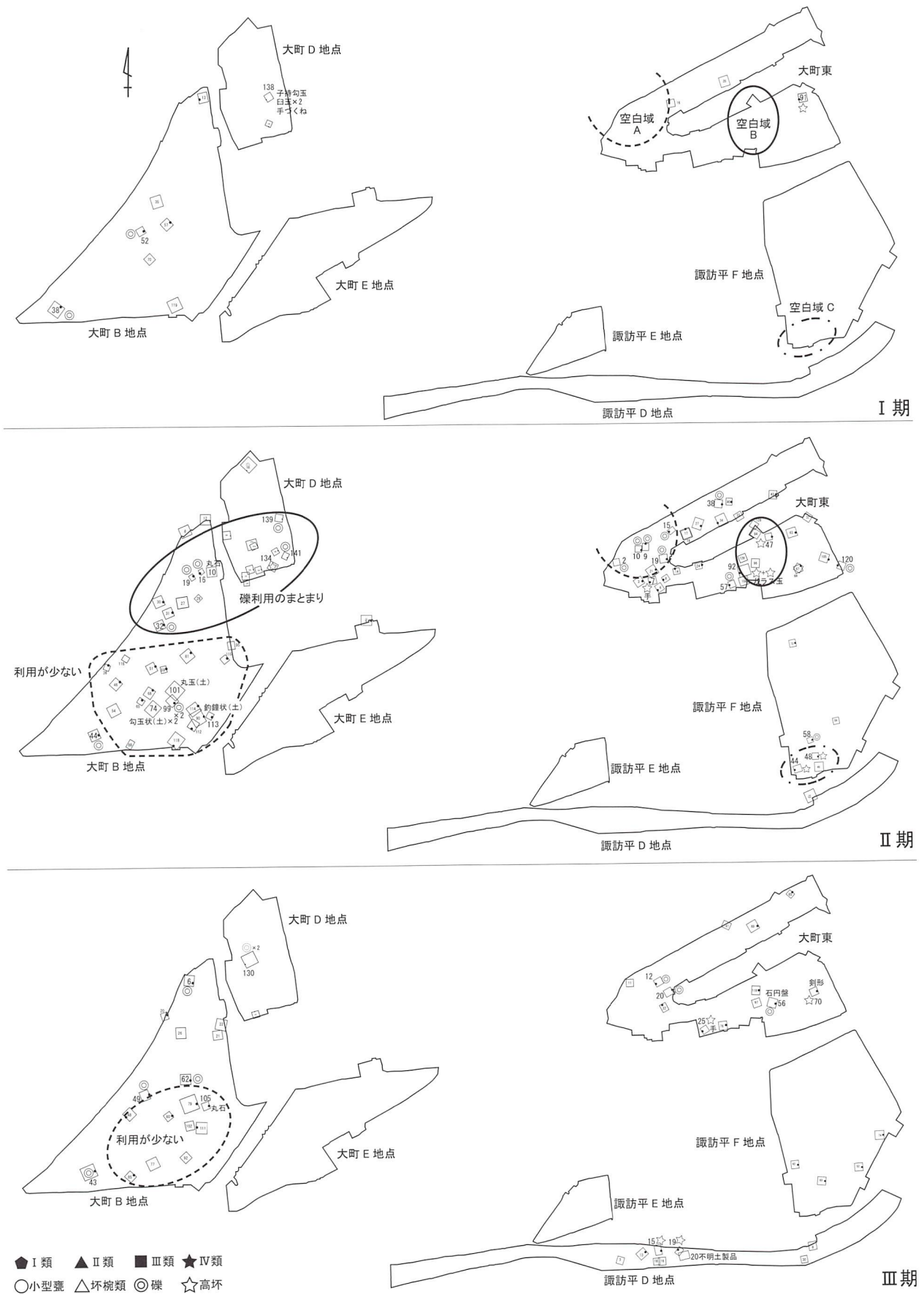
祭祀関連遺物では明確なまとまりを見ることはできないが、秋山大町遺跡のⅡ期に出現する支脚を利用しないグループに土製の祭祀関連遺物がまとまる傾向がある。ただし、Ⅲ期の同じグループには継続しない。

以上の検討結果から秋山遺跡群では①支脚利用ごとのグループと②Ⅱ期の礫利用からグループでの移動、③一定期間集落内の同じ場所を占有するという点が認められた。

(4) 砂田前遺跡(第5図)

深谷市の砂田前遺跡(78)は福川源流から400mほど東の妻沼低地に位置し、図14の地域ケに含まれる。発掘調査は深谷バイパスと道の駅の建設に伴い行われ、古墳時代後期の堅穴建物跡が161軒検出されている。

集落は5世紀後半に1軒という小規模な構成からスタートし、その後一気に拡大していく。ここでは集落が拡大し支脚利用が多く認められる報告書のⅡ期、Ⅲ期古段階、Ⅲ期新段階を組上に乗せる。時期区分はⅡ期が6世紀前半、Ⅲ期古段階6世紀中葉から後半、Ⅲ期新段階が6



第 4 図 秋山遺跡群の支脚利用

世紀末から7世紀前半に該当する。

砂田前遺跡における竪穴建物の分布は明確な境界を意識したまとまりは認められないが、深谷バイパス(以下、BP)調査区では東、中央、西それぞれに継続して竪穴建物群が営まれる。BP調査区SD1・2、道の駅地区SD6は両発掘調査区を分けるように続く溝である。この溝は古墳時代後期に存在したことは確認されていないが地形的に低くなっていたと思われ、BP調査区と道の駅調査区の竪穴建物群を分けている。

Ⅱ期は集落の拡大期である。BP調査区では2つのまとまりがあり、それぞれ高坏転用とⅣ類がセットのように見える。時期的に幅があるので高坏転用からⅣ類へと時期的な変化があった可能性もある。

道の駅調査区では高坏、Ⅳ類、Ⅱ類、小型甕などさまざまな支脚利用が混在する。しかし、調査区の中央付近に転用、Ⅱ類、Ⅳ類という土製の支脚がまとまりその周囲に礫利用が分布するという傾向がみられる。

Ⅲ期古段階になると支脚利用にあまりまとまりがなかった前期に比べて遺跡東側が礫、西側が土製専用支脚と明確に分かれ、土製専用もⅣ類とⅡ類で分かれる。つまり東から礫、Ⅳ類、Ⅱ類となる。礫利用は集落内を分けるSD6をはさんで両側にそれぞれまとまりをもつがBP調査区28号と道の駅調査区41号は礫を横に2個並べて支脚にするという点が共通している。なお、礫を2個並列して支脚にするものは次期の道の駅調査区25号に継続する。

Ⅲ期新段階にはSD6を境にする空間がより広くなり、BP調査区と道の駅調査区のブロック化が鮮明となる。BP調査区では支脚利用が極端に縮小している。道の駅調査区では支脚利用は前段階から継続して礫利用が調査区中央にまとまっている。前期に確認できた土製専用支脚のグループは姿を消して、そこには杯碗類や高坏転用などの土器転用が分布している。支脚利用が継続するグループと短期間で姿を消すグループがあることが分かる。

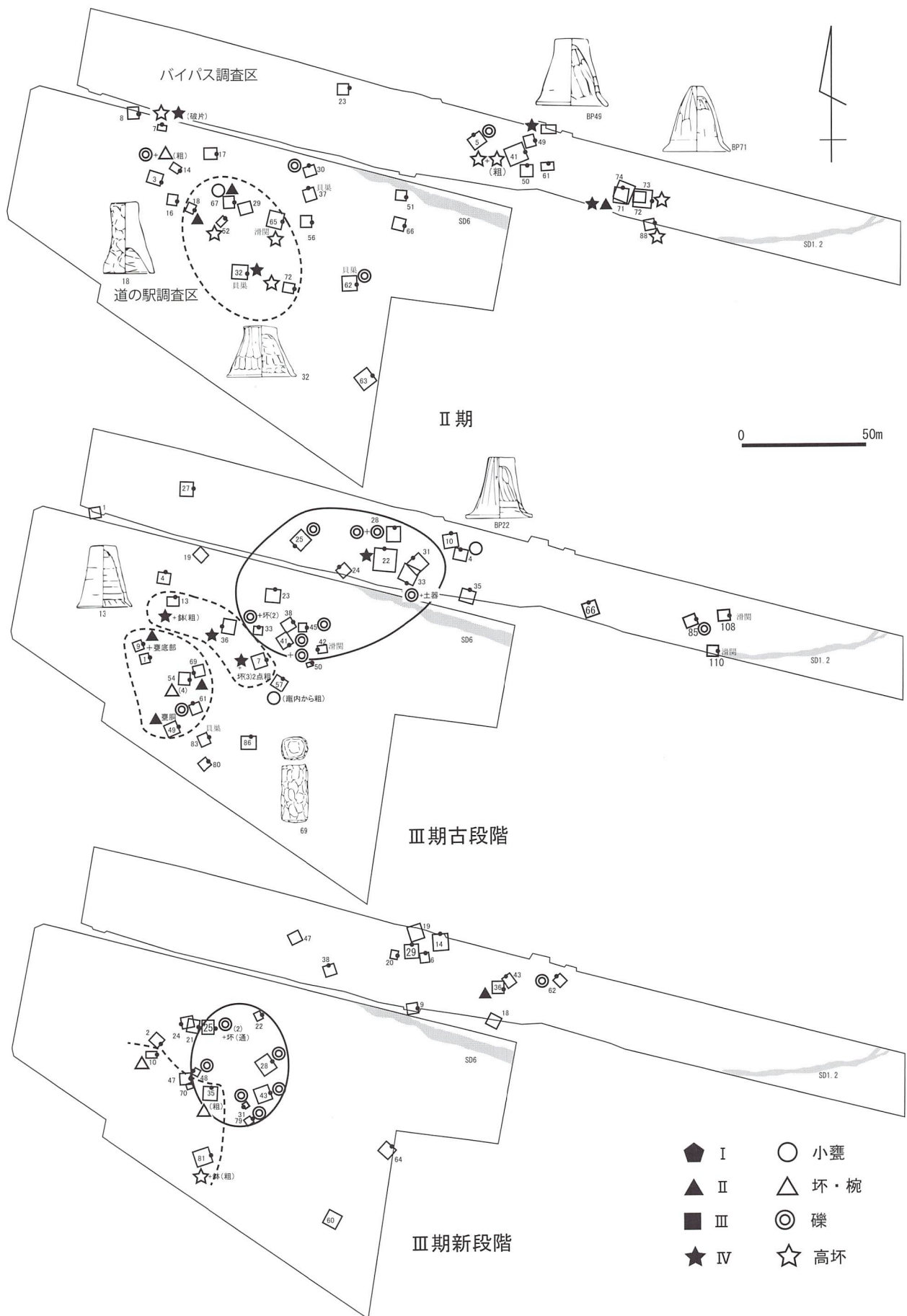
砂田前遺跡ではもう一つ支脚利用に特徴が認められる。それは、支脚に載せられた形で出土する供膳具に粗製のものが多い点である。図5に(粗)と記載しているものがそれで、Ⅱ期のBP調査区41号、道の駅調査区14号、Ⅲ期古段階の道の駅調査区13号、7号、54号そして、Ⅲ期新段階では道の駅調査区35号と81号である。25号のように仕上がりの良い杯を重ねることもあるが(図中に(通)と記載)、粗製の供膳具を明らかに意識して使用していると思われる。紙数の関係で詳述できないが、支脚の上に重ねられる供膳具が粗製のものである遺跡はこのほかにも確認できることからある程度の広がりを持つ行為であると考えられる。

祭祀関連遺物の分布をみるとⅡ期の道の駅調査区で滑石製品などの石製祭祀関連遺物が出土している。しかし、出土している竪穴建物の支脚利用はさまざまで、特定の支脚利用と祭祀関連遺物が結びつくということはない。これはⅢ期古段階でも同様である。

以上砂田前遺跡では①支脚利用ごとのグループと、③一定期間集落内の同じ場所を占有するという点が認められた。②の支脚利用が共通するグループでの移動については明確ではなく、④については確認できていない。

(5) 上敷免遺跡(第6図)

深谷市上敷免遺跡(87)は福川の自然堤防状に形成された地域コに含まれる遺跡である。東に



第5図 砂田前遺跡の支脚利用

隣接して本郷前東遺跡(88)、新屋敷東遺跡(89)がある。

報告書によると調査区は1～6区に分けられているが、この区分けは地形的要因ではなはない。また近代以降に粘土採掘による削平を受けており、すでに消滅してしまった竪穴建物も多く、特に4区の西半分の削平が激しく本来は5区にかけて均一に建物が分布していたと推測されている。5区の中央には9世紀後半に埋没した谷の跡があり古墳時代には土器捨て場として利用されていた。なお紙幅の都合で6区を省略している。

時期区分は私見によるもので、I1期が5世紀第3四半期、I2期が5世紀第4四半期、II期が6世紀前半、III期が6世紀中葉、IV期が6世紀後半、V期が7世紀前半である。

土敷免遺跡では5世紀中葉に4軒の竪穴建物が存在するが、確認できる火処はすべて炉でありカマドはない。

I1期にはカマドを伴う竪穴建物が一気に進出する。これらの建物は1、2区に分布の中心があり、5世紀中葉に竪穴建物が存在していなかった空地に分布している。

確認できる支脚利用は、2区50号にIV類の小片が出土しているだけで、あとは高坏転用である。

祭祀関連遺物は1・2区で滑石製品(図中に滑関と記載)が出土していて高坏転用と関係があるように思える。3・4・5区での出土はない。

I2期になると竪穴建物数はさらに増加する。分布の中心が1・2区にある点は前期と同じであるが、支脚利用は高坏転用が3軒だけとなり他の支脚利用が多くなる。

また、1区では南側に支脚を利用しない竪穴建物のまとまりがあり、それを囲むように高坏転用、小型甕転用、II類、IV類の竪穴建物が存在する。

1区での滑石製品の使用は継続するが高坏転用の住居からは出土せず、主に支脚を使用しないグループに集中する傾向がある。

2区はI類とIV類、小型甕転用2軒の利用が確認できる。支脚利用が多様化するの1区と同じだが、高坏転用が見られなくなること、滑石製品が出土しなくなり代わって土製品となる点が異なる。

3・4区は高坏転用1軒と支脚を使用しない建物数軒という組合せで、これはI1期と同じである。滑石製品が出土しない点も継続している。

注目されるのはI2期に竪穴遺物が増加する5区である。ここにはIV類を利用する竪穴建物が3軒、それに隣接して支脚利用のない竪穴建物がまとまって出現する(A)。そして、このグループからは滑石製品が出土している。IV類を利用する竪穴建物は2区にも分布しているが、滑石製品の出土はなくこの点に違いがある。

II期になると1・2区の竪穴建物は減少しながらも高坏転用がI期以来継続するほか、滑石製品が1区では出土するが2区からは出土しない点も継続する。

3・4区にはII類とIII類の利用が確認されるようになるが、167号のIII類と183号のII類は中央の孔が頂部まで突き抜けているかいないかの違いだけで、形態、整形とも類似品であり基本的にはII類利用が主体となる場所といえよう。さらにこの調査区ではI期以降滑石製品を使用しない点も継続している。また、I2期には竪穴建物の分布が少なかった場所(B)であることから、共通した支脚利用をするまとまりが進出してきた可能性がある。

5区はⅣ類の使用が継続するが、支脚を利用しない竪穴建物のまともりは姿を消してしまう。また滑石製品も出土しなくなるが、石玉が出土していて石製の祭祀関連遺物の利用という点で継続性があるとも言える。

Ⅲ期には竪穴建物の3・4区への集中化が進む。支脚利用の点からみると5区に近い方にⅣ類(A)、その東側にⅡ類、Ⅲ類(B)というように遺跡内での竪穴建物の配置関係はⅡ期と同じである。祭祀関連遺物ではAの193号と169号で石製祭祀関連遺物を伴い継続性が維持されている。しかし、169号では土玉も出土しているし、Bの105号では滑石製品が出土するなど祭祀関連遺物は支脚利用によるグループを越えて使用されるようになってくる。

Ⅳ期にはⅣ類を使うAグループが縮小しながらも遺跡内で西端という位置に営まれ、滑石製品を伴出することも継続する。また3区の竪穴建物は減少し、2区に再び集中するようになるがⅡ類とⅢ類からなる集団でありBグループが移動したように見える。

Ⅴ期には2・3区に竪穴建物が集中し、支脚利用はⅣ類とⅡ類だけとなる。祭祀関連遺物は両調査区から出土している。前期まで見られたA B両グループについては、支脚利用からの継続性は確認できなくなる。

このように、上敷免遺跡では①支脚利用によるグループが存在し、②そのグループで移動をし、③一定定期間集落内の同じ場所(集落内で同じ配置も含め)を占有する場合がある。そして、城北遺跡ほど顕著ではないが④支脚利用と祭祀形態に関係があることが指摘できる。

(6) 一本木前遺跡(第7・8図)

熊谷市の東別府にある一本木前遺跡(103)は、熊谷扇状地端部と妻沼低地が複雑に入り組む低地帯に立地している大規模な遺跡である。第14図の地域シに含まれている。

報告書による時期区分ではⅢ期から古墳時代後期とされている。本論では支脚利用の検討のためⅣ期からⅥ期までを対象とする。年代観はおおよそ6世紀代に該当する。

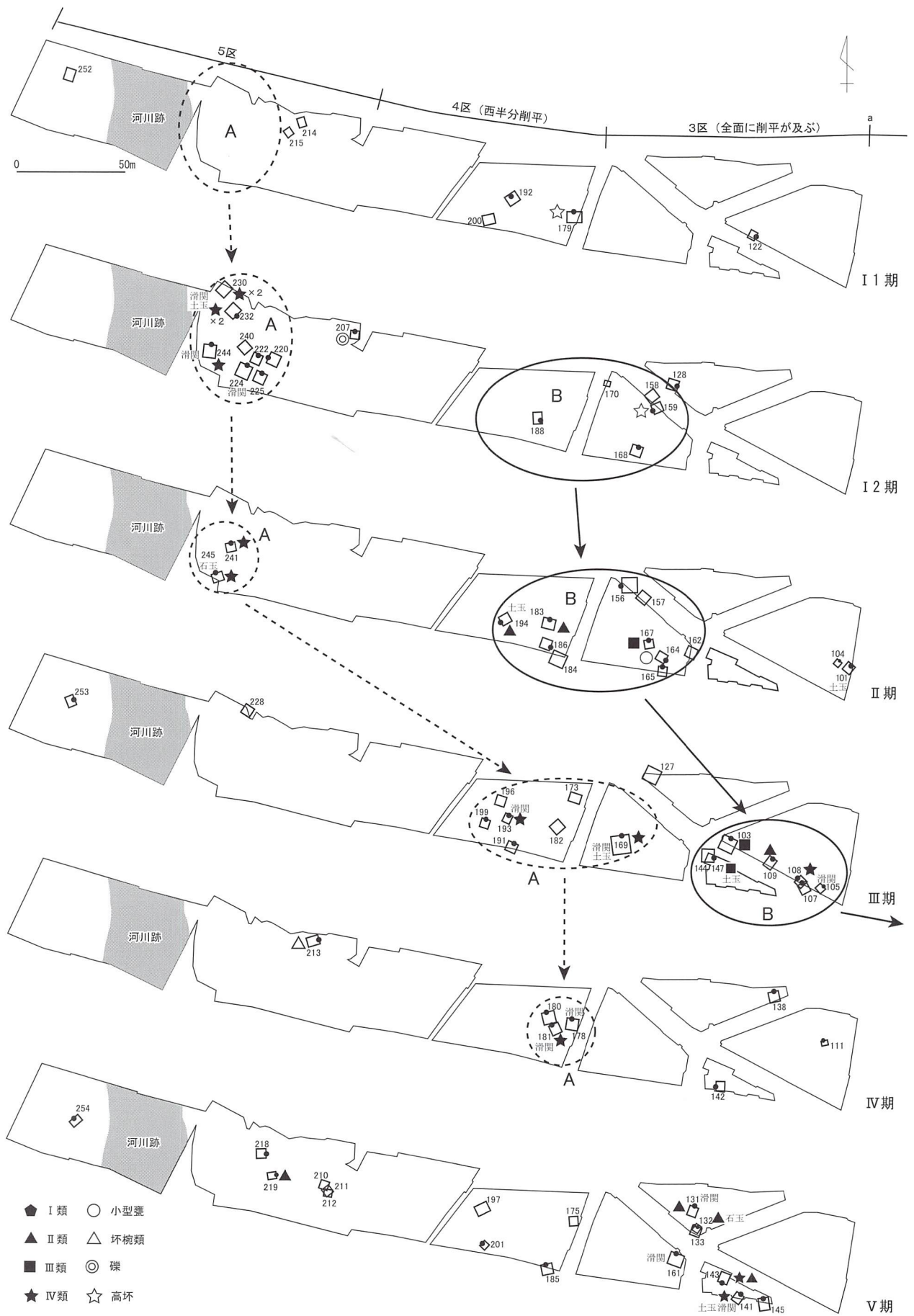
Ⅳ期以前のⅢ新期の状況は、C区北端に羽口を出土する竪穴建物がまともりその中にⅠ類と礫利用が確認できる。また、その東のB区北端に坏椀類転用が認められるがこの段階では支脚利用によりグループ化はできない。

Ⅳ前期(第7図左上)には竪穴建物が散在する程度となる。支脚利用もB区24号の高坏、A区21号の坏椀類、63号のⅣ類がそれぞれ1軒ずつと傾向をつかむことはできない。

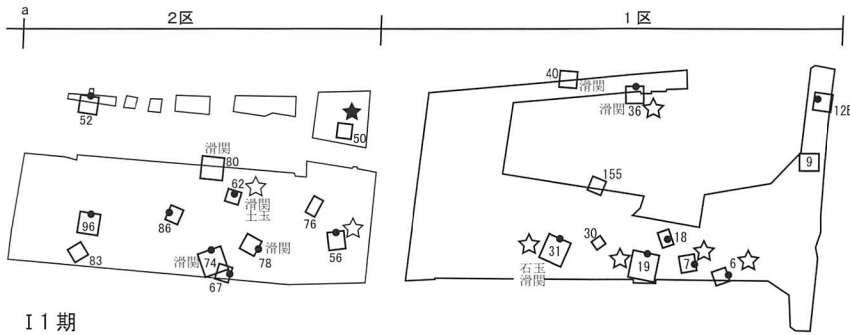
Ⅳ後期になると前期に竪穴建物が分布していなかったF区東側に建物が急増する。F区の建物群を支脚利用で見ると、北側が高坏転用、南側に坏椀転用と分けられる。また、両者とも祭祀関連遺物の出土が見られないという特徴がある。B区南端にも高坏転用のまともりがあるがⅣ前期のB区24号からの継続性について判断はできない。

Ⅴ前期には再び竪穴建物は減少する。支脚利用も検討できるだけの材料はない。祭祀関連遺物についてはF区東側の建物から出土しない点が継続している。

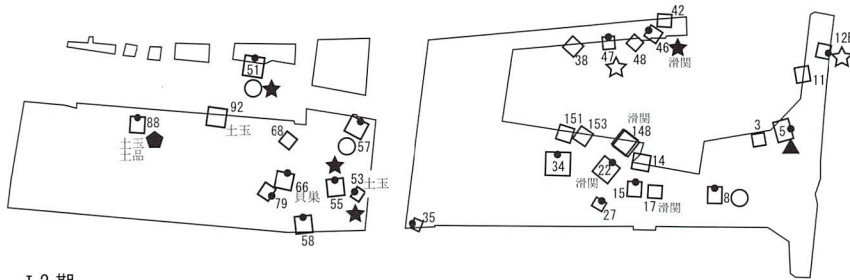
Ⅴ後期には再び竪穴建物が増加する。前期に竪穴建物の空白域であったC区南端には土器転用が、E区北端からB区南端にかけてはⅣ類がまとまる。また、Ⅱ類はD区でしか確認できない。F区東側には支脚を利用しない建物がまともり、その南側にⅣ類を中心とする専用支脚の建物が2軒ある。このF区東側はⅣ後期には土器転用で祭祀関連遺物をもたないまともりがあった



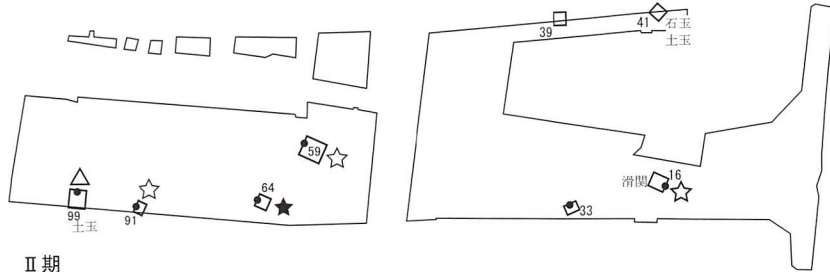
第6図 上敷免



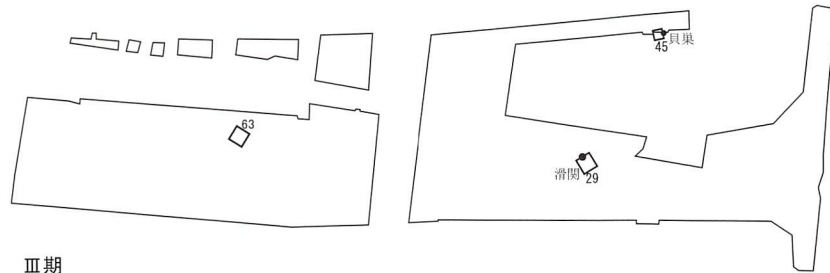
I 1 期



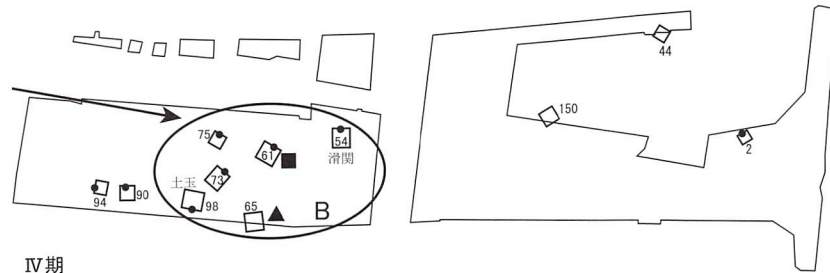
I 2 期



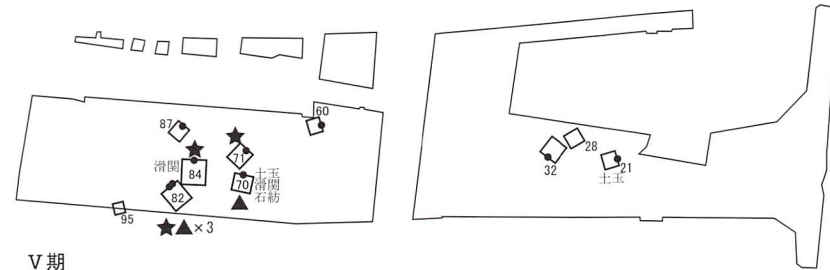
II 期



III 期

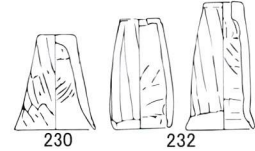


IV 期



V 期

グループA(5区)



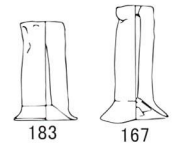
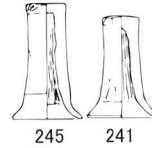
2区

1区



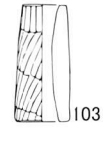
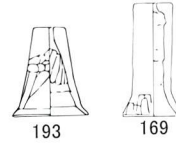
グループA(5区)

グループB(3・4区)



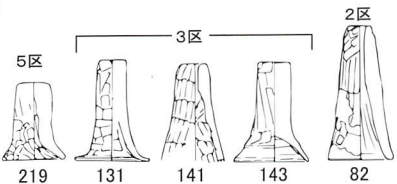
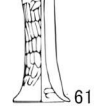
グループA(3・4区)

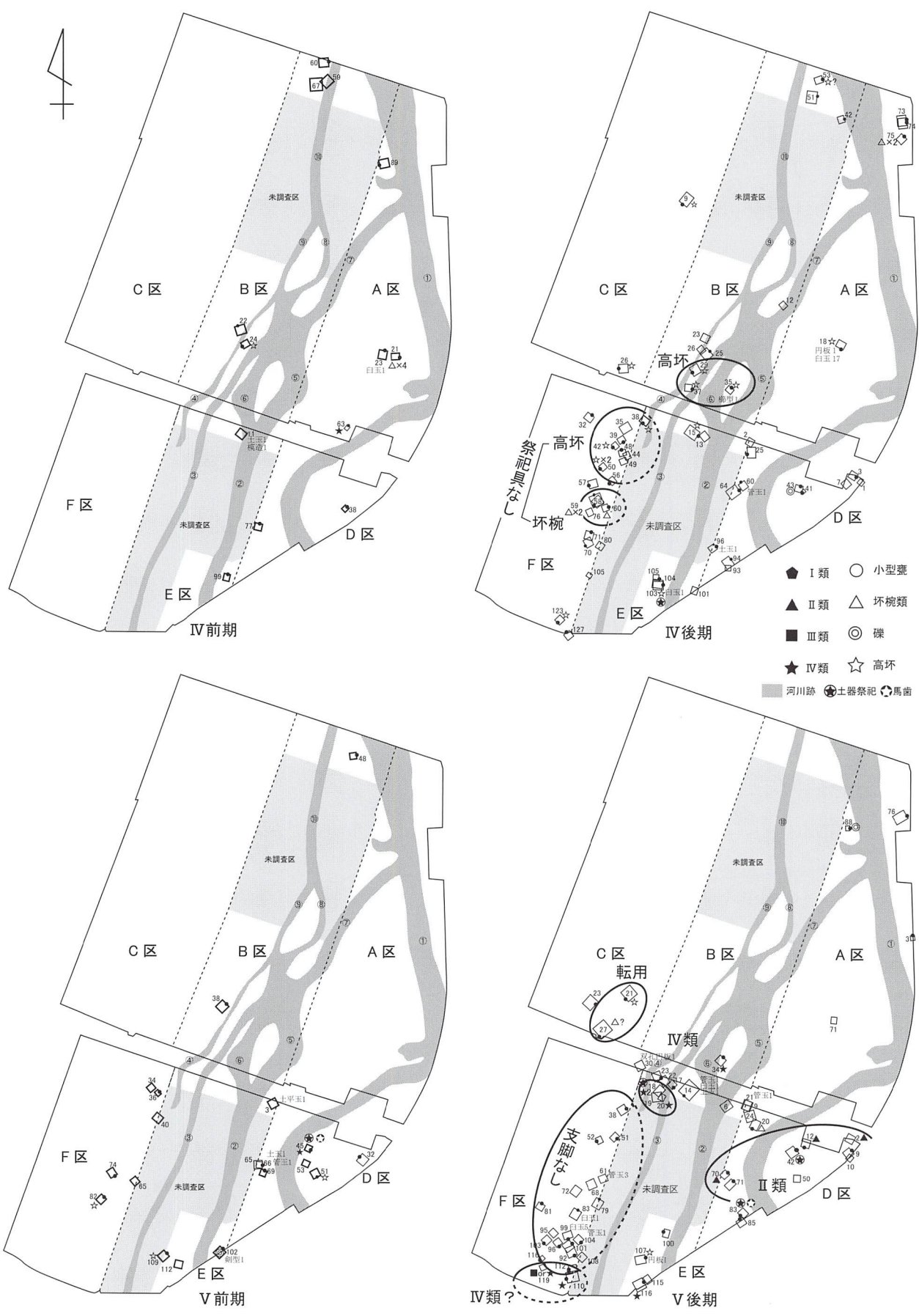
グループB(3区)



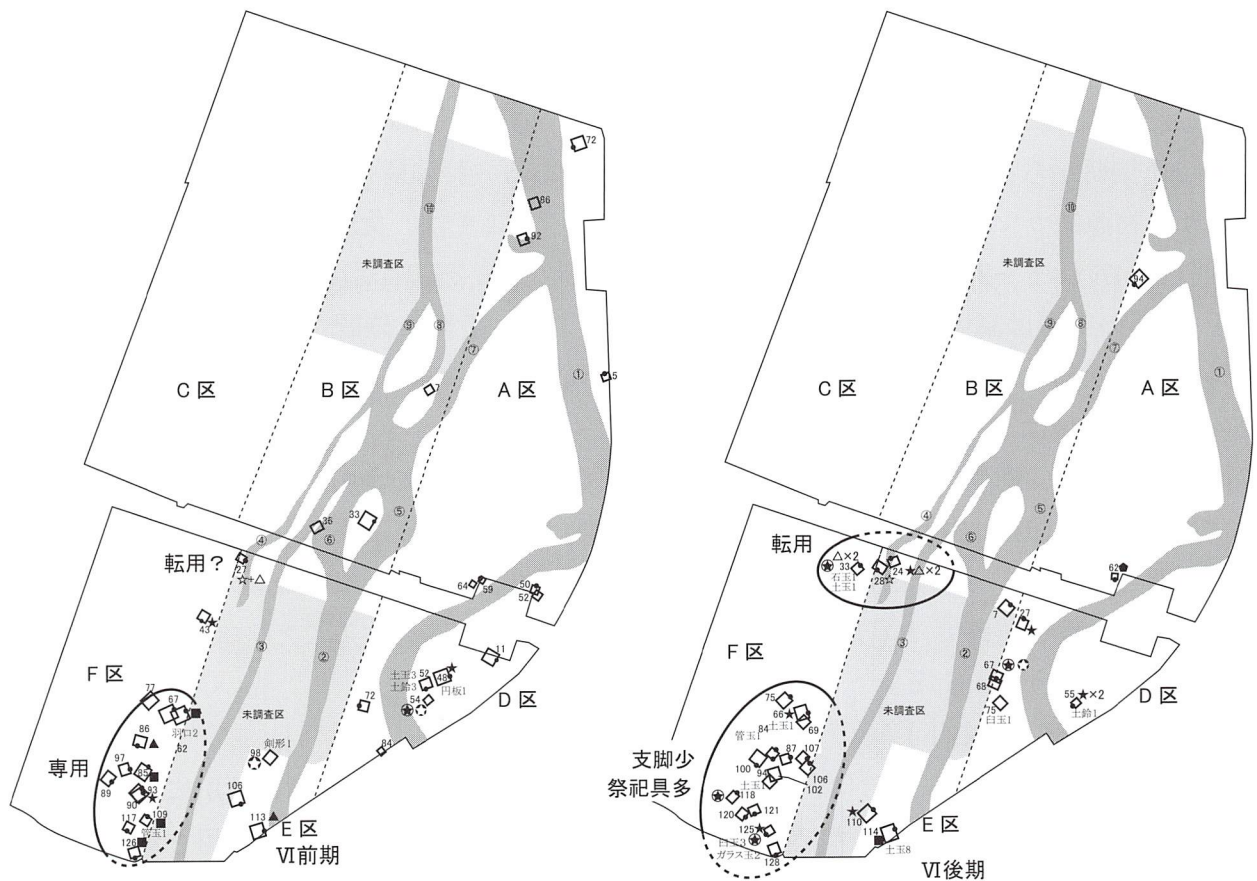
グループA(4区)

グループB(2区)





第7図 一本木前遺跡の支脚利用(1)



第8図 一本木前遺跡の支脚利用 (2)

が、本期に進出してきた支脚を利用しない建物群には石製の祭祀関連遺物が多く伴う。ただし、専用支脚利用の建物からは出土していない。

VI前期には建物がやや減少する。C区南端にあった土器転用のまともりは、E区北端の27号に移動したのであろうか。さらにD区のII類も姿を消す。F区東側では支脚を利用しないグループが見られなくなり、V後期にF区南端に2軒であった専用支脚のグループが拡大していると思われる。拡大した専用支脚のグループでは祭祀関連遺物の出土が109号の管玉1点であり、基本的には伴出しない建物群と考えられる。この点は前段階の専用支脚グループと同じである。

VI後期にはE区北端に土器転用の竪穴建物が2軒と増加する。ただし、前期には祭祀関連遺物を持たなかったが本期では祭祀遺構と祭祀関連遺物を伴う。

F区東側では土製専用支脚の利用が極端に減少し支脚利用が少なくなる。それに合わせるかのように祭祀関連遺物の出土が目立つようになる。つまり、F区東側ではV後期以降、支脚利用なしで祭祀関連遺物あり→VI前期に土製専用支脚利用で祭祀関連遺物なし→VI後期に再び支脚利用なしで祭祀関連遺物ありというように建物群のまとまりが推移することがわかる。

このように一本木前遺跡では①支脚利用が共通する竪穴建物のグループが存在し、F区での支脚利用や祭祀関連遺物のあり方からは、②支脚利用が共通すグループで移動すること、そして、③一定期間集落内の同じ場所を占有する意識がうかがえる。さらに④支脚利用が共通するグループは同じ祭祀関連遺物を利用することが指摘できる。

(7) 桑原遺跡(第9図)

桑原遺跡(148)は坂戸市北部の越辺川と高麗川に挟まれた毛呂台地北東部に立地する。地域テとしたエリアには足洗遺跡(146)、金井遺跡(147)、稻荷前遺跡(150)、塚の越遺跡(151)など古墳時代後期から古代まで継続する大規模な集落がある。特に隣接する棚田遺跡(149)からはいわゆる初源的カマドが検出されていて注目される。ここでは、桑原遺跡の報告書に従い、I-1期(TK47)、I-2期(MT15)、I-3期(6世紀第2、第3四半期)を対象とする。

I-1期の支脚は高坏転用を中心に台付甕転用、I類、II類と確認されているが、高坏転用以外の竪穴建物は北側に集中する。そして、この傾向はI-2期まで継続する。なお、桑原遺跡のII類とIII類は穿孔の有無以外は整形、焼成とも類似する。そして、I-3期には支脚利用の南北が逆転し、南側に専用支脚を伴う建物が多くなるが、そのうち94号と95号は高坏転用のカマドでありII類はカマド以外から出土している点は注意が必要である。

祭祀関連遺物はI-1期とI-2期に見られるが特徴的な分布とはならない。

このように桑原遺跡では①支脚利用が共通するグループが存在すること、③そして一定期間占地することがうかがえる。

(8) 打越遺跡(第9図右下)

富士見市にある打越遺跡(165)は、南北に長い台地上に立地し遺跡の西側は江川に区画される。笹森健一氏が貯蔵穴、入り口、カマドの配置から嫁取り、婿取りの検証にも使用されている(笹森前提書)。

ここで検出された竪穴建物は5世紀末から6世紀初頭のものである。支脚利用の観点で見ると遺跡の西側では支脚利用がなく、中央部分では土器転用、東側ではII類がまとまるという傾向がうかがえる。祭祀関連遺物については出土がほとんどなく検討できる材料がない。なお、図中のL、Rは笹森氏の分析で使用された区分である。笹森氏はR、つまり右カマドを夫方居住とされている。支脚利用のII類とRが重なる部分があり支脚利用と建物構造とに関係性がある可能性が指摘できる。ただし、私は支脚利用の共通性は女性的な結びつきを示すと考えることから夫方居住とは考えていない。

以上、打越遺跡の検討からは①の支脚利用を共通する竪穴建物のまとまりが存在することが確認できた。

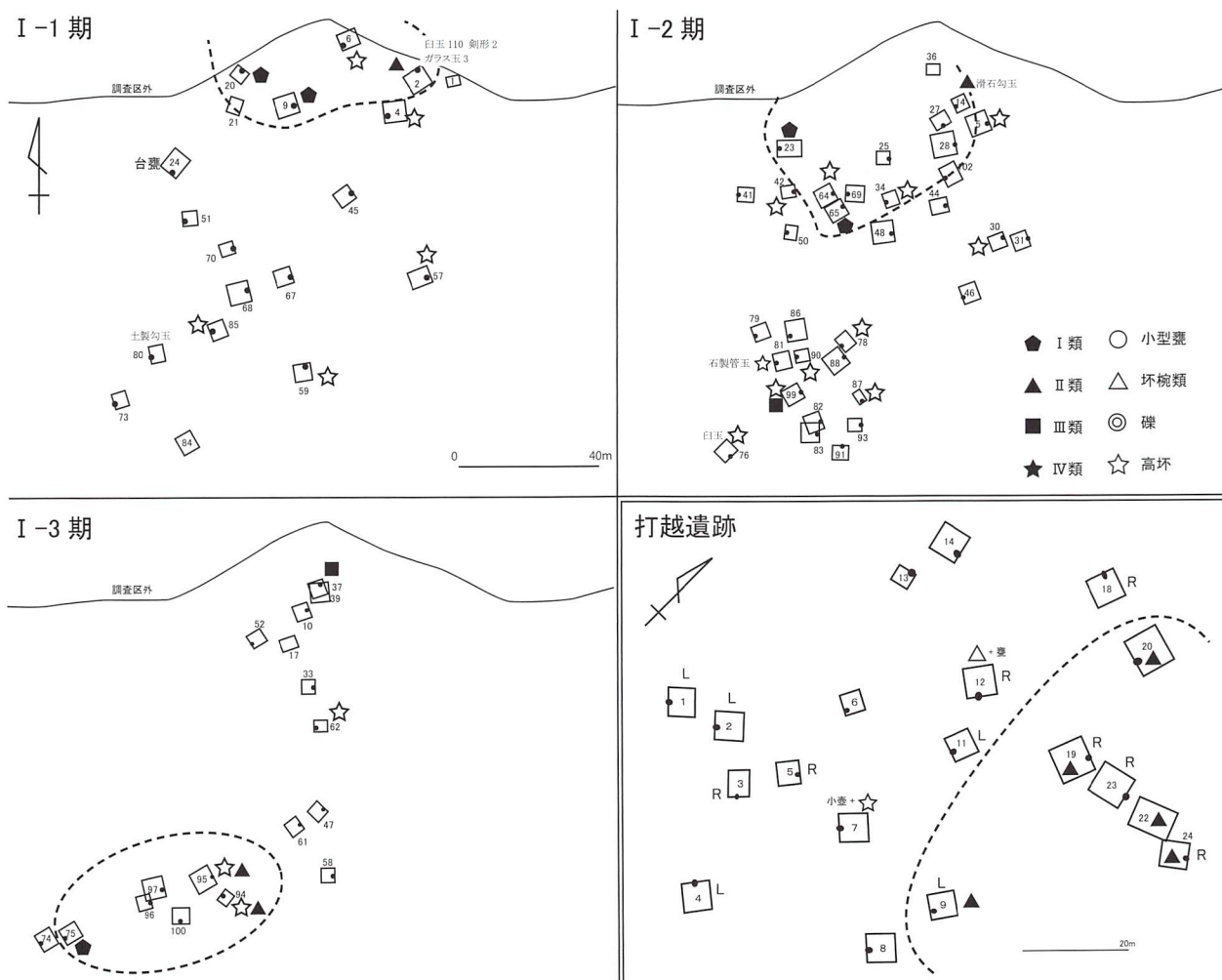
(9) 城山遺跡(第10・11図)

埼玉県南部の志木市城山遺跡(212)は、柳瀬川右岸の台地縁辺部に立地している。これまで70地点以上に及ぶ調査が行われていて、古墳時代だけで200軒を超える竪穴建物が検出されている。

竪穴建物は遺跡全体に分布しているが、特に南側で密度濃く検出されていることからここではこの部分を中心に検討を行う。また、集落の形成は5世紀代に遡るが、支脚利用の様相が顕著となるIII期(6世紀中葉)からVI期(7世紀中葉)について述べる。

時期区分については城山遺跡を中心に土器の研究を積極的に行っている尾形則敏氏の編年観(尾形2012)を参考に一部私見を加えた。

III期以前の竪穴建物は主に第58・60地点に分布している。5世紀後半にはカマドが導入され、



第9図 桑原遺跡・打越遺跡の支脚利用

支脚利用は高坏転用が最も多くほかにⅡ類が確認できる。6世紀前葉には第1地点に建物の分布が多くなるが支脚利用はⅠ類が1軒だけという状況である。

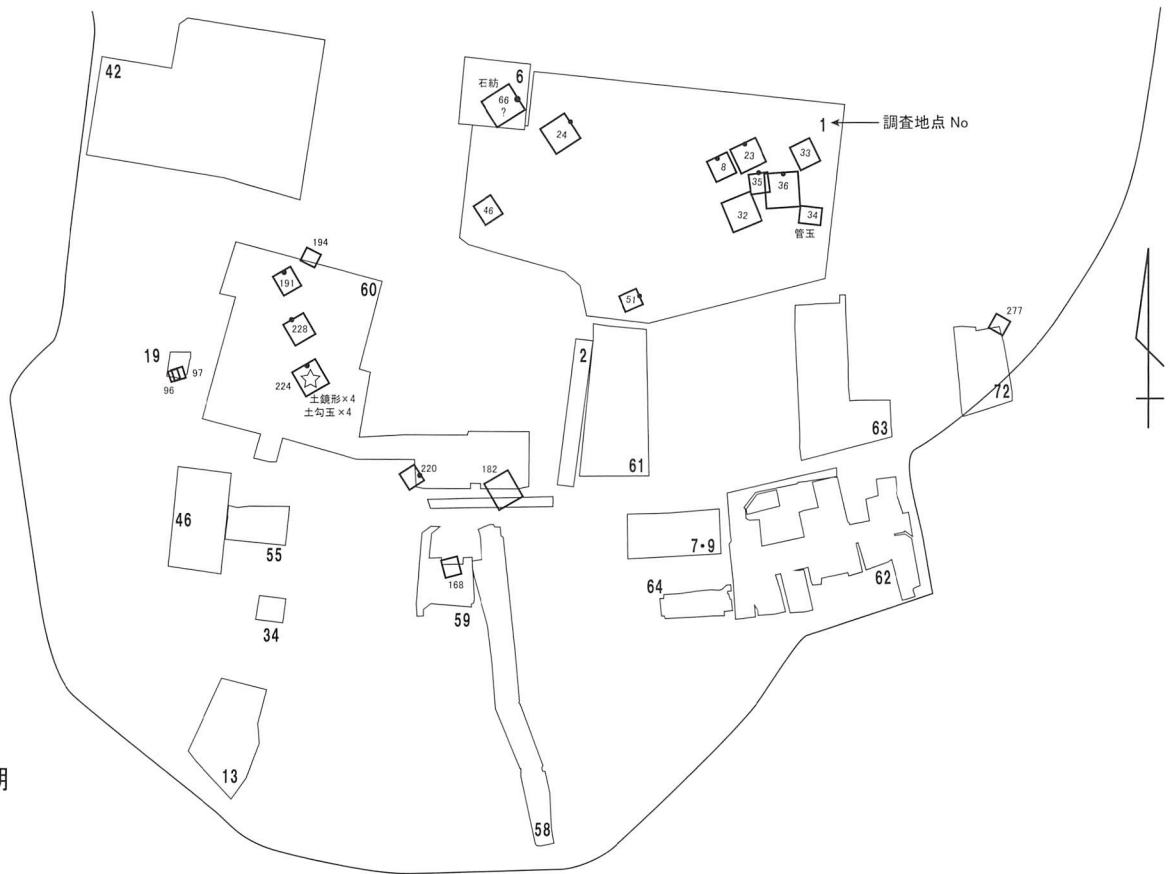
Ⅲ期(第10図上)には前段階から引き続き第1地点に竪穴建物が分布するが支脚利用が確認できるものはない。第1地点の北西に接する第6地点66号は、図示されていないものの報告書に支脚についての記述がある。また、第60地点には高坏転用の224号があり土製の祭祀関連遺物を伴うがこの段階では支脚利用のまともりは確認できない。

Ⅳ期の集落はやや縮小傾向にある。第1地点の建物はⅢ期の空白域にまとまって分布するが支脚利用は認められない。第62地点に1軒(238号)ではあるがⅡ類の利用が認められる。このⅡ類は形状が山形となるⅡb類で、面取りするように縦方向の整形痕が明瞭に残る特徴があり次期以降一定のまとまりを見せることから他のⅡ類と区別して図示した(図中の▲)。なお238号からは羽口が出土しているがこれもⅤ期、Ⅵ期に継続する。

Ⅴ期は竪穴建物が急増し、支脚利用も各地点に見られる。この段階でⅢ類の支脚が出現するが、まとまりをもたずに第1・42・55地点に散在する。第1地点では48号でⅢ類が1軒だけと支脚利用が低調な傾向が継続する。

第62地点では羽口が出土する竪穴建物がまとまるほか、玉造関連の建物も検出されていて手

Ⅲ期

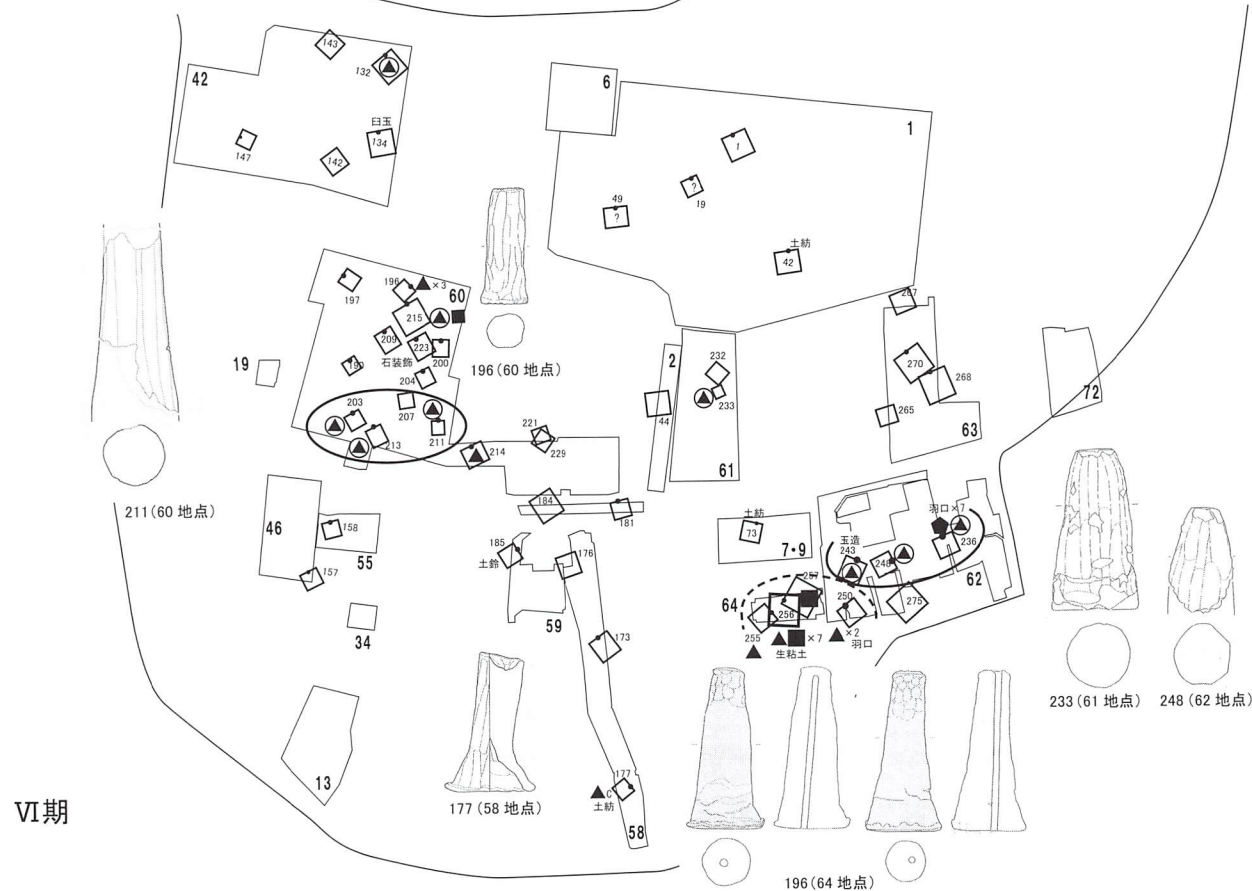
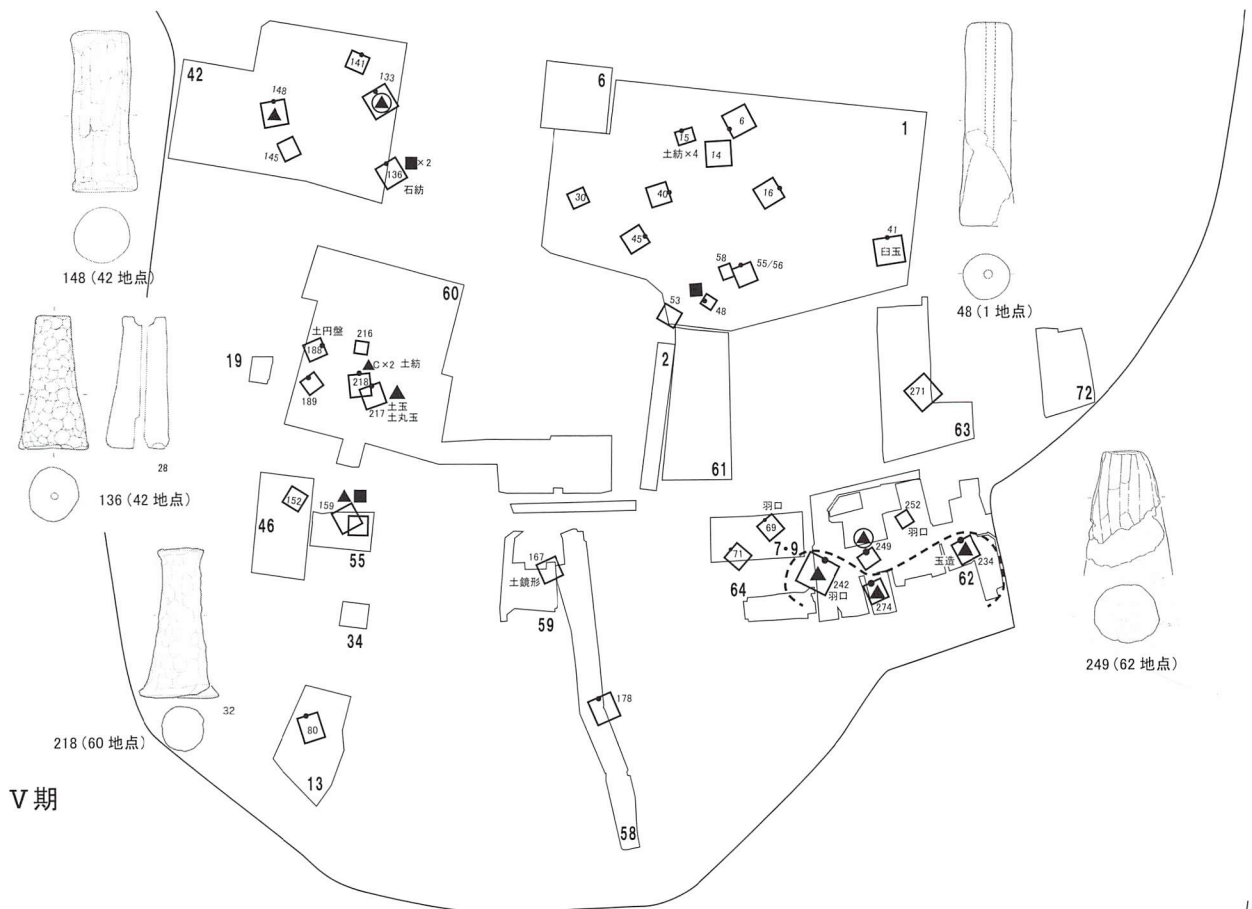


Ⅳ期



- ◆ I類
- ▲ II類
- ▲ (with circle) IIb類
- III類
- ★ IV類
- 小型竪
- △ 坏椀類
- ◎ 碟
- ☆ 高坏

第10図 城山遺跡の支脚利用 (1)



第11図 城山遺跡の支脚利用 (2)

工業のエリアとなっている。支脚利用ではⅣ期に建物が分布していない調査区南側にⅡ類がまとまり(破線)、Ⅳ期から継続するように1軒だけだがⅡb類が分布する(249号)。

第60地点では再び堅穴建物が分布するようになり支脚利用はⅡ類である。この地点では土製祭祀関連遺物が出土しているが、Ⅲ期の224号との関連については不明である。

Ⅵ期には第60地点の堅穴建物が増加するが、その主体は新たに進出してきたⅡb類を利用するグループであることが分かる(実線)。Ⅴ期に主体であったⅡ類を利用する建物は、Ⅱb類の建物を避けるような配置となっている。なお、土製の祭祀関連遺物は出土が見られなくなっている。

第62、64地点では引き続き鍛冶と玉造が行われていたようである。支脚利用の分布は前段階の位置関係を踏襲して北側にⅡb類、南側にⅡ、Ⅲ類がそれぞれまとまる⁽⁴⁾。

また第1地点ではこれまで支脚利用が少なかったが、報告書によると19号と49号の2軒から土製専用支脚が出土したことが記述されている。

城山遺跡の支脚利用からは、①支脚利用が共通する堅穴建物がまとまること、そしてⅥ期の第60地点で見られたⅡb類の出現は、②支脚利用が共通するグループでの移動を示す可能性がある。また、第62地点のように支脚利用が共通するグループが堅穴建物の位置関係を保つことから③一定期間の占地が確認できる。ただし④祭祀関連遺物と支脚利用に有意な関係性は認められなかった。

(10) 中田遺跡(第12図)

これまで埼玉県内の遺跡について述べてきたが、ここで1例だけ県外の八王子市中田遺跡を取り上げてみたい。これは、多摩西部地域も支脚利用率が高い集落が多いと思われることや、中田遺跡が古墳時代の集落研究で取り上げられる機会が多く検討材料を追加することに意味があると考えたことによる。

なお、中田遺跡については1989年房総風土記の丘で行われたシンポジウムで土居義夫氏が、発掘当時の調査手法の限界として未調査エリアがあることを指摘しているが(土居他1989)、それを踏まえてもある程度の傾向は示していると考ええる。時期区分はF地区の調査報告書をもとにする。年代観はⅢa期が6世紀後半から末、Ⅲb期は7世紀初頭から前半、そして古墳時代後期後半が7世紀中葉から後半である。

Ⅲa期では一見してわかるとおりE地区に高坏転用、C、F地区にⅡ類と明確な違いがある。C地区に1点ある14号のⅢ類の穿孔は細く、つくりはⅡ類と同じといえる。このⅢ類は次期D地区29号、次々期D地区20号と継続する。

祭祀関連遺物では土玉の出土がC地区、つまり土製専用支脚のエリアに集中する。

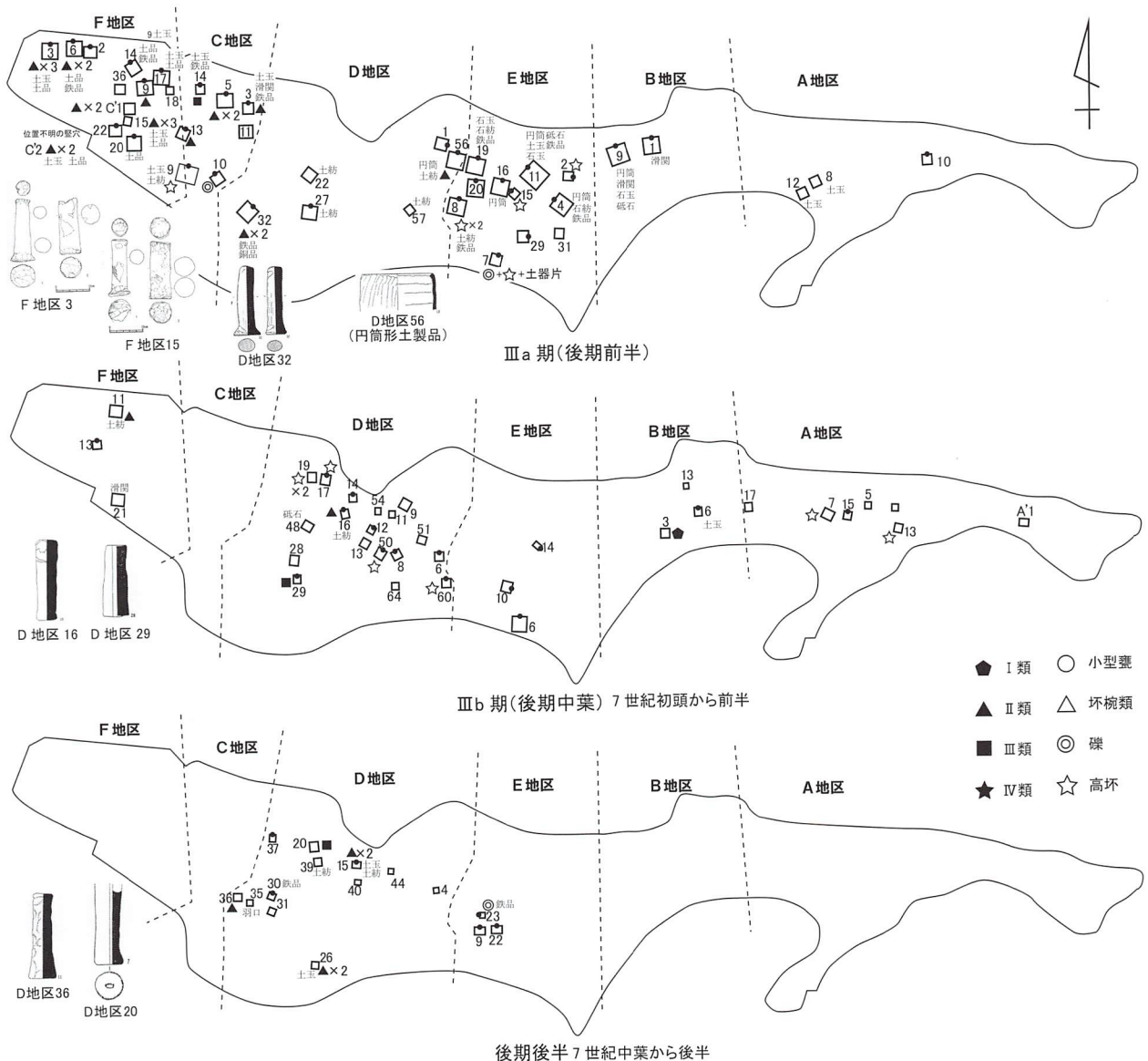
カマドの構築材ではないかとされる円筒形土器については、高坏転用エリアと分布が重なる。しかし、高坏転用の建物からは出土していないことから直接的な関係は導けない。

Ⅲb期になるとⅢa期に堅穴建物が少なかったD地区中央に建物が集中する。またA地区でも増加している。この変化について報告書では「強固な靱帯で結ばれていた各住居跡群が解体し、ムラ全体から住居跡群のあり方が規定されていった結果、Ⅲb期のような住居跡配置に変化」した結果と捉えている(鶴間2009)。

支脚利用から見てみると高坏転用が優勢だが、A地区では高坏転用、B地区は土製専用、D地区では東側に高坏転用、西側に土製専用となる。そして、F地区は土製専用が継続するなどⅢa期の配置を意識している。集落規模が縮小する際に、土製専用と高坏転用のグループがまとまってⅢa期に建物が少なかったD地区に居住域を形成した結果と考えられる。

前期にⅡ類と関係の深かった祭祀関連遺物である土玉はB地区6号の1軒でしか出土していない。このことは、土玉を使用しない高坏転用グループが祭祀的には主導権を握ったことの現れかもしれない。

古墳時代後期後半には集落は衰退傾向にあるが、Ⅲb期から継続してD地区に竪穴建物が集中する。D地区では土製専用支脚のみが使われている。高坏そのものの生産が縮小した結果とも考えられるが、埼玉県北部の城北遺跡や上敷免遺跡では高坏転用から小型甕、杯椀類など他の土器を転用するようになるのに対して中田遺跡ではそうした傾向はつかめない。また、土玉



第12図 中田遺跡の支脚利用

	①共通したグループ	②グループでの移動	③一定期間の占地	④共通の祭祀
城北遺跡	○	○	○	○
西富田遺跡群	○	○	△	×
秋山遺跡群	○	○	○	×
砂田前遺跡	○	△	○	×
上敷免遺跡	○	○	○	△
一本木前遺跡	○	○	○	○
桑原遺跡	○	○	×	×
打越遺跡	○	×	×	×
城山遺跡	○	○	△	×
中田遺跡	○	○	○	○

表1 検討結果一覧

の使用が土製専用支脚に伴うという点からも、この時期には高坏転用で土玉・滑石を使わないという集団から、土製専用、土玉を使う集団が中心になったとも考えられる。また少し離れたE地区に礫利用の23号があることはグループの違いによる住み分けといえる。

このように中田遺跡では城北遺跡ほど顕著ではないが①～④すべての項目が確認できる。

(11) 検討結果

ここでこれまで検討してきた各遺跡の状況を表にしてみよう(表1)。これを見ると、①支脚利用が共通するグループがあることと、②そのグループで移動することは一般的であるといえる。また、③移動に当たってはかつて竪穴建物を構えていた場所、あるいは集落内での建物配置を踏襲した場所を一定期間占地するケースが多いことも分かる。

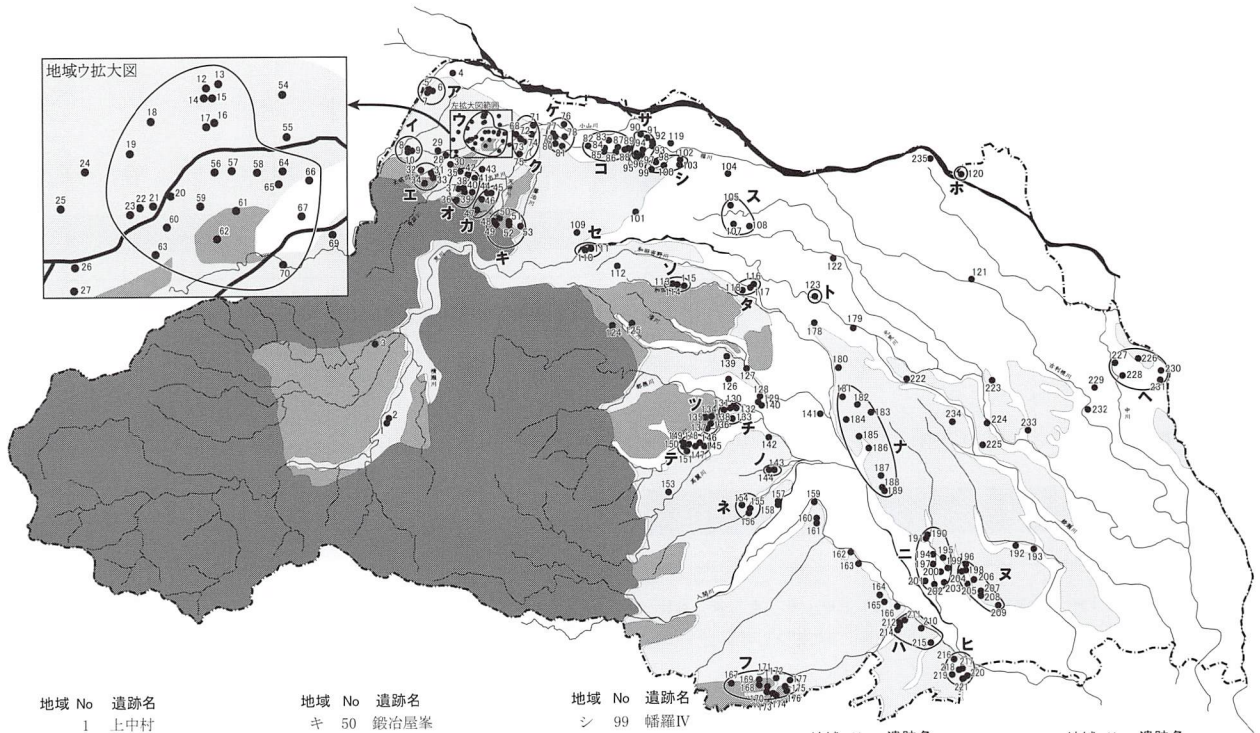
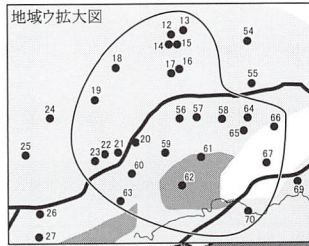
この結果から、支脚の利用が女性的な結びつきを示すものと考えれば、少なくとも5世紀後半から7世紀中葉にかけての埼玉県を中心とした地域の集落では竪穴建物の居住者は母系的つながりを中心に暮らしていた可能性が高いことが推測できる。さらに、一定期間の占地を考えると、そのつながりは2世代から3世代程度は継続するものであった可能性がある。

一方、④祭祀については支脚利用と明確に関係性を持つ遺跡は少ない。このことは祭祀のあり方は支脚利用を越えたまとまり(いくつかの支脚利用グループをまとめた規模)が単位となっていた可能性を示している。この祭祀を共通するまとまりの中心に存在したのが男性か女性かは不明であるが、城北遺跡、一本木遺跡、中田遺跡のように一つの支脚利用と祭祀関連遺物に密接な関係が認められる例があることから、女性が中心となっていた場合も想定すべきであろう。

4 支脚利用の地域性

各遺跡内では支脚利用をとおして女性的な結びつきを示すと考えられるまとまりが垣間見えたが、この紐帯はどの程度の面的な広がりがあるのかを検討するため今回集めることができた235遺跡のデータを集計した。

私が拾うことができた支脚利用は1530軒である⁽⁵⁾。このうち伴出遺物などから時期が把握できるものは1433軒で、これを分布図に表わしたものが第13図である。図をみると遺跡はある程度まとまって分布することがわかる。このまとまりをAからホの30地域に分けて検討を進める。



地域	No	遺跡名
	1	上中村
	2	中村
	3	銭本堂
	4	原
ア	5	臺
ア	6	若宮台
ア	7	高野谷戸
イ	8	中道
イ	9	西北原
イ	10	南塚原11号墳
ウ	11	往来北
ウ	12	弥藤次
ウ	13	二本松
ウ	14	夏目西
ウ	15	夏目
ウ	16	薬師元屋舗
ウ	17	社具路
ウ	18	諏訪
ウ	19	今井原屋敷
ウ	20	川越田
ウ	21	今井川越田
ウ	22	前田甲
ウ	23	柿島
ウ	24	将監塚・古井戸
ウ	25	塚畠
ウ	26	辻堂
ウ	27	南街道
ウ	28	金佐奈
ウ	29	反り町
ウ	30	女池
エ	31	塩谷下大塚
エ	32	ミカド
エ	33	倉林後
エ	34	高柳原
オ	35	児玉清水
オ	36	秋山東
オ	37	秋山大町
オ	38	秋山大町東
オ	39	秋山諏訪平
オ	40	諏か神社前
オ	41	後山王
オ	42	大久保
カ	43	樋之口
カ	44	北貝戸
カ	45	畑中
カ	46	宇佐久保
カ	47	白石古墳群
キ	48	川向
	49	森後

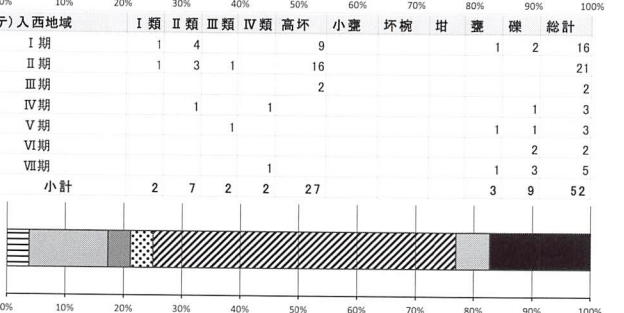
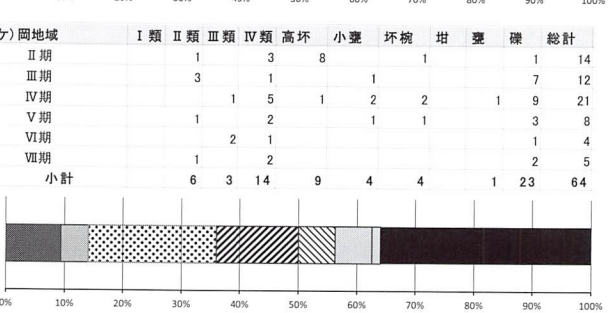
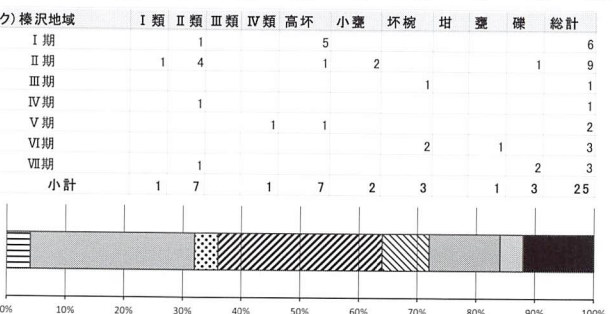
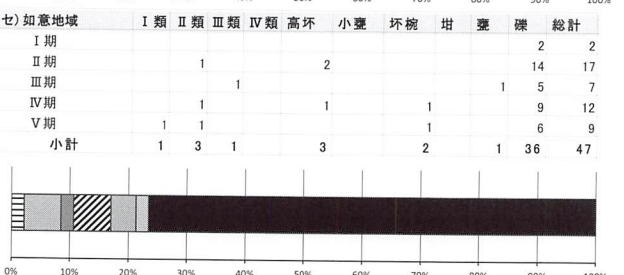
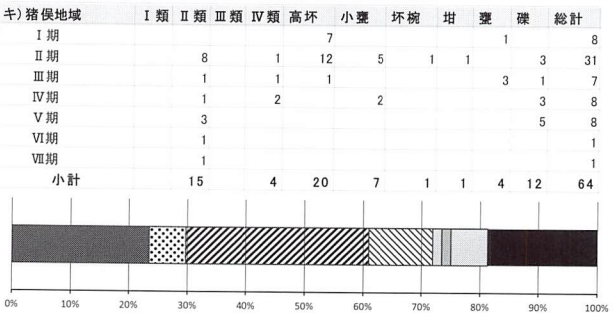
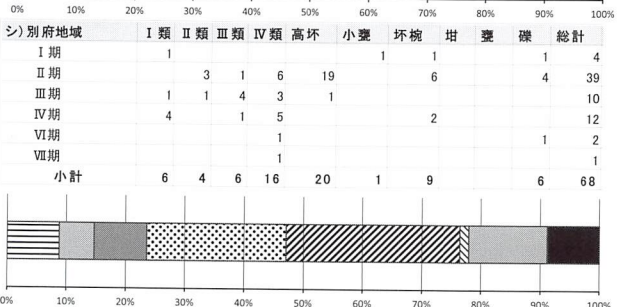
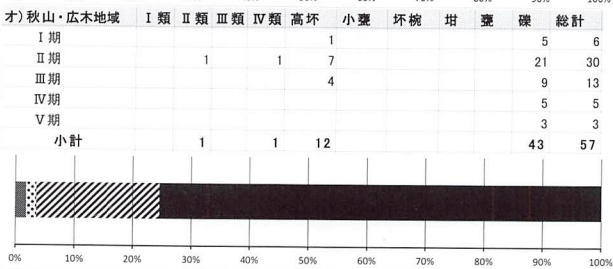
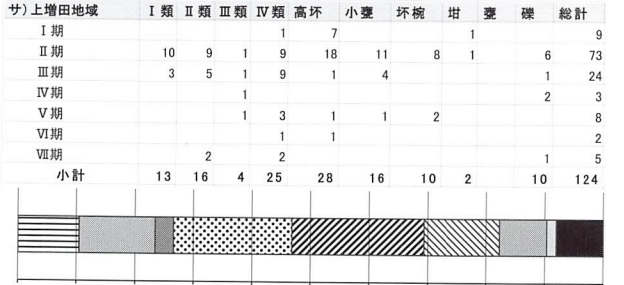
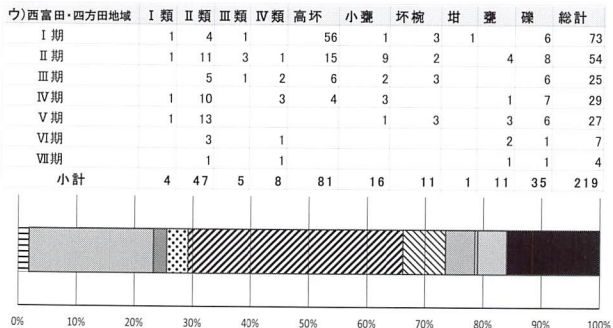
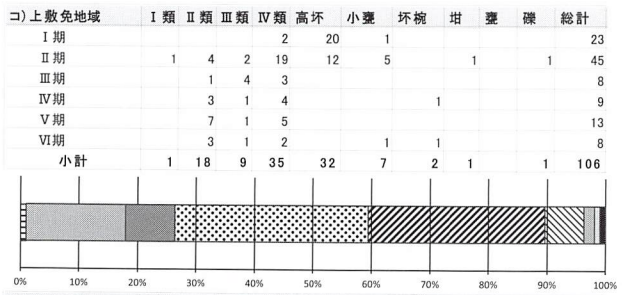
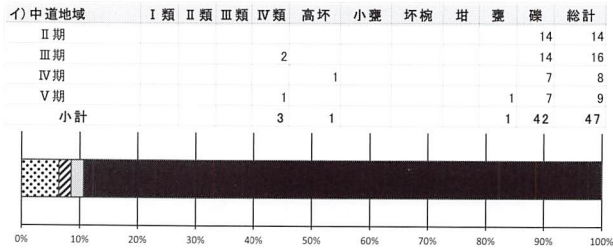
地域	No	遺跡名
キ	50	鍛冶屋峯
キ	51	猪俣北古墳群
キ	52	上野
キ	53	前峯
	54	雌滝
	55	笠ヶ谷戸
ウ	56	四方田
ウ	57	下田
ウ	58	七色塚
ウ	59	後張
ウ	60	東牧西分
ウ	61	大久保山
ウ	62	雷電下
ウ	63	浅見境北
ウ	64	久下東
ウ	65	久下前
ウ	66	北堀新田前
ウ	67	東谷
ク	68	西五十子古墳群
ウ	69	古川端
ウ	70	村後
ク	71	東五十子
ク	72	六反田
ク	73	大寄
ク	74	宮西
ク	75	地神祇A
ケ	76	町田西
ケ	77	上宿
ケ	78	砂田前
ケ	79	中宿
ケ	80	熊野
ケ	81	白山
コ	82	堀東
コ	83	高畠
コ	84	皿沼西
コ	85	戸森前
コ	86	八日市
コ	87	上敷免
コ	88	本郷前東
コ	89	新屋敷東
サ	90	砂田
サ	91	柳町
サ	92	城北
サ	93	居立
サ	94	原
サ	95	宮ヶ谷戸
サ	96	堀の内
サ	97	東川端
シ	98	清水上

地域	No	遺跡名
シ	99	幡羅IV
シ	100	関下
	101	三ヶ尻天王
シ	102	入川
シ	103	一本木前
	104	光屋敷
ス	105	北島
ス	106	古宮
ス	107	藤之宮
ス	108	小敷田
	109	宮林
セ	110	如意II
セ	111	川端
	112	権現堂
ソ	113	本田東台II
ソ	114	宮脇
ソ	115	元境内
タ	116	下田町
タ	117	成願
タ	118	箕輪
	119	飯塚南
ホ	120	飯積
	121	水深
	122	小針
ト	123	築道下
	124	越赤
	125	大木前
	126	菴田
	127	観音寺
	128	古凍根岸裏
	129	古吉海道
チ	130	銭塚
チ	131	城敷
チ	132	反町
チ	133	大西
ツ	134	舞台
ツ	135	緑山
ツ	136	大塚原
ツ	137	駒堀
チ	138	大門
	139	東耕地
	140	東町
	141	元宿
	142	附島
ノ	143	前林
ノ	144	上谷
テ	145	下田
テ	146	足洗
テ	147	金井

地域	No	遺跡名
テ	148	桑原
テ	149	棚田
テ	150	稲荷前
テ	151	塚の越
テ	152	長岡
	153	矢島
ネ	154	鶴ヶ丘
ネ	155	御伊勢原
ネ	156	上組
	157	山王久保
	158	天王第5
	159	川越城跡
	160	小仙波四丁目
	161	弁天西
	162	川崎
	163	滝
	164	宮脇
	165	打越
	166	水川前
フ	167	日向
フ	168	海谷
フ	169	宮前
フ	170	山口城跡
フ	171	美園上
フ	172	六ツ家
フ	173	本村
フ	174	畦の前
フ	175	東内手
フ	176	北久米
フ	177	東の上
	178	宮前本田
	179	中三谷
	180	赤台
ナ	181	八重塚
ナ	182	諏訪野
ナ	183	愛宕耕地
ナ	184	東台I
ナ	185	八幡耕地
ナ	186	領家・宮下
ナ	187	宿北II
ナ	188	稲荷台
ナ	189	畔吉
ニ	190	水判土堀の内
ニ	191	B-105
	192	北宿
	193	馬場東
ニ	194	根切

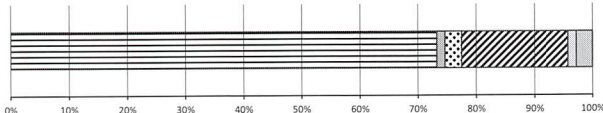
地域	No	遺跡名
ニ	195	苗塚
ヌ	196	小井戸
ヌ	197	宿宮前
ヌ	198	札之辻
ニ	199	上大久保新田
ニ	200	大久保領家片町
ニ	201	堤根
ニ	202	下大久保新田
ヌ	203	本村
ヌ	204	山久保
	205	日向
ヌ	206	大戸本村8号
ヌ	207	別所子野上
ヌ	208	別所西野台
ヌ	209	根岸
ハ	210	大瀬戸東
ハ	211	中野
ハ	212	城山
ハ	213	中道
ハ	214	西原大塚
ハ	215	中道・中道下
ヒ	216	花ノ木
ヒ	217	牛王山
ヒ	218	四ツ木
ヒ	219	妙蓮寺
ヒ	220	吹上
ヒ	221	市場峽・市場上
	222	宮ノ脇
	223	中妻
	224	荒川附
	225	殿の下
ヘ	226	宮の腰
	227	上椿
	228	下椿
ヘ	229	大堀荒田
ヘ	230	貝の内
ヘ	231	陣屋
	232	小瀬山下
	233	上野
	234	大山
	235	屋敷裏

第13図 支脚の分布

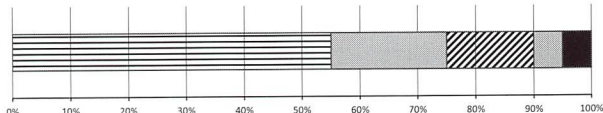


第14図 地域別の支脚利用割合 (1)

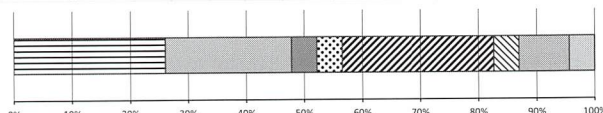
ト) 築道下遺跡	I類	II類	III類	IV類	高坏	小甕	坏椀	埴	甕	磔	総計
I期	7					8					15
III期	14				2	1					17
IV期	11			2					1		14
V期	12	1		2	1					1	17
VI期	6										6
VII期	2										2
小計	52	1		2	13	1				2	71



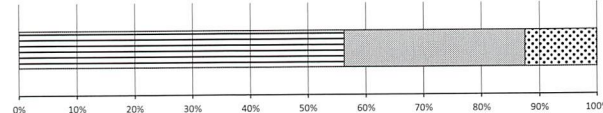
ナ) 川田谷・領家地域	I類	II類	III類	IV類	高坏	小甕	坏椀	埴	甕	磔	総計
I期	1				1						2
III期	1	4			1		1				7
IV期	1				1					1	3
V期	6										6
VI期	1										1
VII期	1										1
小計	11	4			3		1			1	20



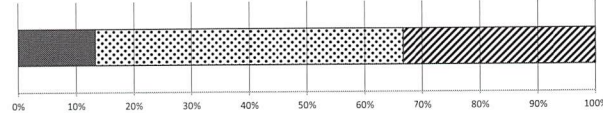
ニ) 鴨川地域	I類	II類	III類	IV類	高坏	小甕	坏椀	埴	甕	磔	総計
I期	1				5	1	2				9
III期	1	3			1						5
IV期		1									1
V期	2			1							3
VI期									1		1
VII期	2	1	1								4
小計	6	5	1	1	6	1	2		1		23



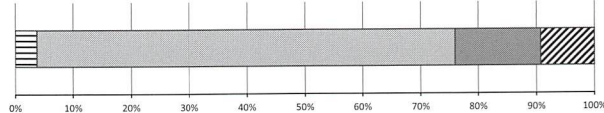
ヌ) 鴻沼地域	I類	II類	III類	IV類	高坏	小甕	坏椀	埴	甕	磔	総計
III期	1										1
IV期	3	1									4
V期	4			1							5
VI期	1	3		1							5
VII期		1									1
小計	9	5		2							16



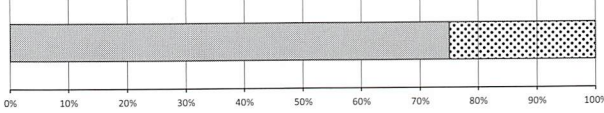
ノ) 東坂戸地域	I類	II類	III類	IV類	高坏	小甕	坏椀	埴	甕	磔	総計
I期					2						2
II期		1		1	3						5
III期		1		4							5
IV期				3							3
小計		2		8	5						15



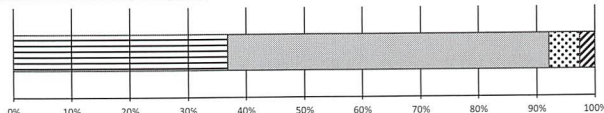
ハ) 城山地域	I類	II類	III類	IV類	高坏	小甕	坏椀	埴	甕	磔	総計
I期		1	4			4					9
II期		1									1
III期			1		1						2
IV期				3							3
V期		1	11	5							17
VI期			17	3							20
VII期			2								2
小計		2	39	8		5					54



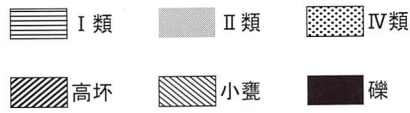
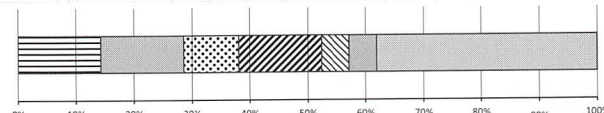
ヒ) 和光地域	I類	II類	III類	IV類	高坏	小甕	坏椀	埴	甕	磔	総計
IV期			3	2							5
V期			5	1							6
VI期			1								1
VII期			3	1							4
小計			12	4							16



フ) 所沢地域	I類	II類	III類	IV類	高坏	小甕	坏椀	埴	甕	磔	総計
I期			1	2							3
II期			2		1						3
III期			6								6
IV期			3	4							7
V期			3	4							7
VI期			2	2							4
VII期			6	2							8
小計			14	21		2	1				38



ホ) 飯積遺跡	I類	II類	III類	IV類	高坏	小甕	坏椀	埴	甕	磔	総計
I期			1	1	1						3
II期		2	1	1	1	1			1		7
III期								1			1
IV期		1	1		1						3
VI期										1	1
VII期										6	6
小計		3	3	2	3	1	1			8	21



第15図 地域別の支脚利用割合 (2)

地域の呼称は地名や地域内で代表する遺跡名を使用した。また、トの築道下遺跡やホの飯積遺跡は周辺に支脚利用が確認できる遺跡がなく1遺跡で1地域とした。

第14・15図は30の地域の中で支脚利用が15軒以上確認できるものを選んで時期別、利用支脚別に表にしたものである。各表の下にある棒グラフは、地域内の支脚すべてを時期に関係なく利用形態ごとに割合で示している。表に用いている時期の年代観は、I期が5世紀中葉から後半、II期が5世紀末から6世紀前半、III期が6世紀中葉、IV期が6世紀後半、V期が7世紀前半、VI期が7世紀中葉、VII期が7世紀後半である。

第14・15図をみると支脚利用に地域性があることが指摘できる。Ⅰ類を最も多く使用する地域は、タ(下田町地域)、ト(築道下遺跡)、ナ(川田谷・領家地域)、ニ(鴨川地域)、ヌ(鴻沼地域)で、これらの地域は元荒川や入間川流域(現荒川)に沿うように分布していることが分かる。特に築道下遺跡では70%以上の割合でⅠ類を使用している。なお、築道下遺跡の下流にある中三谷遺跡(179)や宮前本田遺跡(178)、赤台遺跡(180)では出土数は少ないものの確認できる支脚利用はⅠ類だけである。また、フ(所沢地域)でもⅠ類の出土が多いが、粘土塊をブロック状に積上げるなど入間川流域のⅠ類とは若干様相が異なるものである。

次にⅡ類であるが、土製専用の支脚の中では最も簡単にできることから多くの地域で利用されている。その中で特にⅡ類の占める割合が高いのは、ハ(城山地域)、ヒ(和光地域)、フ(所沢地域)など柳瀬川や新河岸川流域となっている。

Ⅳ類も地域性がある。Ⅳ類は高坏の脚部と同じ技法で製作され、土師器と変わらない仕上がりであるものが多いことから土師器製作技術を持つ者が作り使用していたと考えられる。使用割合が高い地域は、ケ(岡地域)、コ(上敷免地域)、サ(上増田地域)、シ(別府地域)、ソ(東坂戸地域)となる。ケ～シは福川流域の集落群で、この地域は6世紀中葉以降に広域流通品となる有段口縁坏の故地である。またソの東坂戸地域も広域流通品である赤い胎土で赤彩される土器群の生産拠点と考えられる地域である(尾形2008)。ヒの和光地域のようにⅣ類が少数だが出土する地域は、在地色の強い土師器生産が行われていた可能性がある。

転用支脚では小型甕の利用に地域差が認められる。小型甕転用が1軒以下しかない地域は、イ(中道地域)、オ(秋山・広木地域)、セ(如意地域)、タ(下田町地域)、テ(入西地域)、ト(築道下遺跡)、ナ(川田谷・領家地域)、ニ(鴨川地域)、ノ(東坂戸地域)、ヌ(鴻沼地域)、ハ(城山地域)、ヒ(和光地域)、フ(所沢地域)、ホ(飯積遺跡)である。このうちイ、オ、セの地域は周辺から手ごろな礫が入手可能であることから礫の使用が卓越していて、小型甕に限らず礫以外の支脚利用が極端に少ない地域である。それ以外はホの飯積遺跡を除いて県中央部から南部にかけて分布する地域である。また、この地域の遺跡は小型甕転用に限らず土器を支脚に転用すること自体が県北部の地域に比べて少ないことが分かる。

このように、支脚には年代別にみれば遺跡内でさまざまな種類の利用があるが、古墳時代後期を通してみると小地域を越えた一定のエリア内で共通する傾向があることが分かる。

支脚利用に政治的な背景がないとすればこのエリアは、人々の日常的な営みの中で培われていた民俗文化を共通する範囲であったと推測できる。このように文化を共有するエリアの存在について尾形氏は、土師器の分析を行う中で、遺跡が集中するエリアが多数存在することを示し「こうした地域は、古くから1つの文化を共有するまとまりがあったと考えることができる」と述べている(尾形2008)。尾形氏の示した範囲と支脚利用でくくられる地域は必ずしも一致しないが、古くから文化を共有するまとまりがさまざまなレベルで形成されていたことをうかがわせる。そして古墳時代に政治的な背景をもって“流通”したモノは、すでに存在していたこうした民俗文化的まとまりを利用して供給されていったと推測されるのである⁽⁶⁾。

おわりに

県内の集落遺跡を支脚利用から検討を加え、その共通性を集落内における母系的なつながりと想定したが、実際に竪穴建物内にはどのような構成の人々が暮らしていたのかということを知るには支脚だけでは難しい。

古代の家族については文献史学によく研究の蓄積がある(田中禎昭2016)。これらの研究によれば、古代の家族の基本形態は母系的な結びつきからなる対偶婚的小家族とされ、その場合においては、たびたび離婚、再婚を繰り返すことが指摘されている。つまり奈良時代以降の古代においては、妻方居住が一般的であったとの考えが一定の支持を得ているのである。

これに対して考古学では近年、古墳や横穴墓から出土した人骨の分析から親族構造に踏み込む研究が注目されてきた(田中良之2008、清家2010)。特に田中氏の5世紀後半を境に農民層も家父長的原理に変化していくという主張は広く受け入れられつつあるように思える。しかし、古墳などに葬られた人々のまとまりを、簡単に集落内でのまとまりに置き換えることは慎重に行うべきであろう。やはり、人々の日常的な紐帯を検討するのであれば、集落遺跡にも目を向けて検討を加えることが重要と考える。

また、支脚利用でまとまる竪穴建物群が世帯共同体といわれるような経済的な単位であったのかどうかという点も考察を進めるべきところであるが、これについては他の出土遺物や周辺の古墳群との関係など、より多角的な視点からの検討が必要となると考えている。

以上、長々と文を進めてきたが冒頭にも述べたように、これからも古墳時代の集落研究では黒井峯遺跡のような遺跡に注目するのは大切である。しかし、火山灰に埋もれた遺跡が地域的に限定されることや、大多数の集落遺跡の調査では検出不可能な遺構の存在など通常の集落遺跡との比較検討は難しいと言わざるを得ない。やはり毎年数多く調査されている集落遺跡を細かく、そしてさまざまな視点から検討を加えることにもっと傾注すべきではないかと感じている。本論でその一つの可能性を示すことができているならば幸いである。

なお、紙数の関係で参考文献を十分に提示できなかった。ご容赦いただきたい。

《註》

- (1) 本論で検討した遺跡以上に大規模で支脚利用が多く確認できた遺跡もあるが、遺構間の重複が激しく時期の特定ができない建物や、遺物の帰属が明確でない建物が多い遺跡は検討対象としなかった。
- (2) 竪穴建物が2、3軒であるものや重複関係にある場合も一つのまとまりとして扱っている。本論で使用する各遺跡の時期区分の幅は15年から30年程度あり、グループとした竪穴遺物すべてが同時存在とは断定できない。提示した建物のまとまりが建替えの結果みえているものであることも十分想定できる。しかし、城北遺跡や中田遺跡のように数軒以上のまとまりを見せる場合もあることや、調査区外の建物の存在を考慮して一つのまとまりとした。なお同時存在で支脚利用が共通する建物は、2軒から多くても5軒以下であろう。
- (3) 竪穴遺物が同じ場所で継続していなくても、遺跡内での建物の配置関係が踏襲されている場合も含めて占有意識が継続していると考えている。
- (4) 62地点や64地点は鍛冶や玉造など手工業生産に関わる竪穴建物群であるが、こうした場所でも支脚利用にまとまりが見られることは、手工業生産における男女の役割分担等を考えるきっかけにもなると思われる。
- (5) 集計に当たって1軒の竪穴建物から複数の支脚が出土している場合は、カマドから出土している支脚利

用を優先し、覆土から複数の支脚が出土した場合は残存率の高い方を集計対象とした。

(6)ここで示したエリアの中には、田中広明氏が土器の供給パターンで第1次再分配や第1次供給集落とした範囲(田中広明1991、1992)や、埴輪の供給域などと整合する可能性があると考えている。

《参考文献》

- 明石一紀 2002 「古代・中世の家族と親族」『日本家族史論集2』吉川弘文館
- 恋河内昭彦 2008 「第V章児玉地方の土製支脚について－第79号住居跡出土の土製専用支脚とその周辺－」『塚畠遺跡Ⅱ－F地点の調査－』本庄市遺跡調査会報告書第22集 本庄市遺跡調査会
- 大谷 徹 2007 「Ⅶ調査のまとめ 1 夏目遺跡群の土器用様相」『夏目／夏目西／弥藤次』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第346集
- 大村 直 1989 「考古学における家族論の方向」『史館第21号』
- 大村 直 1989 「集落研究の今後の方向」『シンポジウム房総の古墳文化－古代集落研究の現状－ 千葉県立房総風土記の丘年報13』千葉県立房総風土記の丘
- 大村 直 1990 「古墳時代のムラと家族はどのようなものか」『争点日本の歴史第2巻古代編Ⅰ』
- 大村 直 1992 「5 古代東国社会の基盤」『新版[古代の日本]』第八巻関東
- 大村 直 1993 「ムラの廃絶・断続・継続」『市原市文化財センター紀要Ⅱ』
- 小笠原好彦 1989 「古墳時代の堅穴住居集落にみる単位集団の移動」『国立歴史民俗博物館研究報告第22集』
- 尾形則敏 2008 「古墳時代後期の土師器研究の再認識－(仮称)「入間系土師器の実態と生産地推定を例にして－」『埼玉考古43』 埼玉考古学会
- 尾形則敏 2012 「第4章調査のまとめ 第1節古墳時代中・後期」『城山遺跡第62地点』志木市の文化財第48集
- 笹森健一 1990 「堅穴住居の使い方」『古墳時代の研究2 集落と豪族居館』雄山閣
- 笹森健一 2007 「4 古墳時代から奈良・平安時代の堅穴住居」『住まいの考古学』学生社
- 末木啓介 2011 「集落における集合原理の一視点－埼玉県深谷市城北遺跡のカマド支脚利用の検討から－」『土曜考古第34号』 土曜考古学研究会
- 杉井 健 1993 「竈の地域性とその背景」『考古学研究第40巻第1号』考古学研究会
- 杉本一樹 2002 「日本古代家族研究の原状と課題－関口裕子・吉田孝・明石一紀説を中心に－」『日本家族史論集2 家族史の展望』吉川弘文館
- 清家 章 2010 『古墳時代の埋葬原理と親族構造』大阪大学出版会
- 関口裕子 2004 『日本古代家族史の研究(上下)』塙書房
- 高久健二 2012 「I 集落」『古墳時代研究の現状と課題 下 社会・政治・構造及び生産流通研究』同成社
- 高群逸枝 1975 『招婿婚の研究1・2』理論社
- 田中広明 1991 「古墳時代後期の土器生産と集落への供給－有段口縁坏の展開と在地社会の動態－」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中広明 1992 「V 考察－古墳時代後期の北武蔵と新屋敷東遺跡」『新屋敷東・本郷前東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中禎昭 2016 「古代家族論の現状と課題」『月刊考古学ジャーナルNo.691』ニューサイエンス社
- 田中良之 2008 『骨が語る古代の家族 親族と社会』吉川弘文館
- 都出比呂志 1982 「原始土器と女性－弥生時代の性別分業と婚姻居住規定－」『日本女性史1 原始・古代』
- 都出比呂志 1989 「大開拓と階層差の増大」『古代史復原6 古墳時代の王と民衆』講談社
- 鶴間正昭 2009 「V 成果と課題2)弥生時代・古墳時代・奈良・平安時代」『中田遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第231集 東京都埋蔵文化財センター
- 土居義夫他 1989 「シンポジウム房総の古墳文化－古代集落研究の現状－」『千葉県立房総風土記の丘年報13』
- 野村育世 2005 『『日本霊異記』の女と男』『歴史評論No.668』
- 広瀬和雄 1994 「考古学から見た古代の村落」『岩波講座日本通史3巻 古代2』
- 平川 南 1996 「里刀自小論－いわき市荒田目条里遺跡第二号木簡から－」『国立歴史民俗博物館研究報告

第66集』

- 福田信子 1998 「5土製支脚について」『三吉野遺跡群』東京都埋蔵文化財センター調査報告第60集 東京都埋蔵文化財センター
- 服藤早苗 1996 「6古代の母と子」『日本の古代12 女性の力』中央公論社
- 三浦佑之 2010 『平城京の家族たち』角川学芸出版
- 森 浩一 1996 「3古墳にみる女性の社会的地位」『日本の古代12 女性の力』中央公論社

第2図から第13図に使用した遺跡の調査報告書

城北遺跡

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995 『城北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第150集

西富田遺跡群

- 本庄市教育委員会 1985 『夏目遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告書第5集第2分冊
- 本庄市教育委員会 1987 『社具路遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告書第5集第3分冊
- 本庄市教育委員会 1987 『南大通り線内遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告書第9集第1分冊
- 本庄市教育委員会 1989 『南大通り線内遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告書第9集第2分冊
- 本庄市教育委員会 1991 『南大通り線内遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告書第9集第3分冊
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2007 『夏目／夏目西／弥藤次』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第346集

秋山遺跡群

- 本庄市遺跡調査会 2010 『秋山大町遺跡-B・C・D・E地点の調査-』本庄市遺跡調査会報告書第36集
- 本庄市遺跡調査会 2010 『秋山大町東遺跡／秋山諏訪平遺跡-D・E・F地点の調査-』本庄市遺跡調査会報告書第37集

砂田前遺跡

- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991 『樋詰・砂田前』埼玉県埋蔵文化財調査事業団第102集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998 『砂田前遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団198集
- 岡部町教育委員会 1998 『岡部条里遺跡』埼玉県大里郡岡部町埋蔵文化財調査報告書第3集

上敷免遺跡

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993 『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団第128集

一本木前遺跡

- 熊谷市教育委員会 2000 『一本木前遺跡』
- 熊谷市教育委員会 2001 『一本木前遺跡Ⅱ』
- 熊谷市教育委員会 2002 『一本木前遺跡Ⅲ』
- 熊谷市教育委員会 2003 『一本木前遺跡Ⅳ』
- 熊谷市教育委員会 2004 『一本木前遺跡Ⅴ』

桑原遺跡

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992 『桑原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団121集

打越遺跡

- 富士見市教育委員会 1978 『打越遺跡』富士見市文化財調査報告第14集
- 富士見市教育委員会 1983 『打越遺跡』富士見市文化財調査報告第26集

城山遺跡(図示した範囲内の支脚が出土した地点に限る)

- 埼玉県志木市遺跡調査会 1988 『城山遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第4集 ※第1地点
- 埼玉県志木市遺跡調査会 2005 『城山遺跡第42地点』志木市遺跡調査会第10集
- 埼玉県志木市遺跡調査会 2008 『城山遺跡第61地点』志木市遺跡調査会第16集
- 埼玉県志木市遺跡調査会 2008 『城山遺跡第58・60地点』志木市遺跡調査会第17集
- 志木市教育委員会 1991 『志木市遺跡群Ⅲ』志木市の文化財第16集 ※第7・9地点
- 志木市教育委員会 1999 『志木市遺跡群Ⅸ』志木市の文化財第27集 ※第34地点

- 志木市教育委員会 2008 『志木市遺跡群16』 志木市の文化財第38集 ※第46・55地点
 志木市教育委員会 2011 『志木市遺跡群19』 志木市の文化財第45集 ※第59地点
 志木市教育委員会 2012 『城山遺跡第62地点』志木市の文化財第48集
 志木市教育委員会 2013 『城山遺跡第64地点』志木市の文化財第53集
 志木市教育委員会 2014 『志木市遺跡群21』志木市の文化財第58集 ※第62地点

中田遺跡

- 八王子市中田遺跡調査会 1966 『中田遺跡 資料編Ⅰ』
 八王子市中田遺跡調査会 1967 『中田遺跡 資料編Ⅱ』
 八王子市中田遺跡調査会 1968 『中田遺跡 資料編Ⅲ』
 東京都埋蔵文化財センター 2009 『中田遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第231集